

大正十年十二月十日發行(毎月一回發行)

十二月號

現代青年の陥り易き思想上の深穿

親鸞聖人渴仰の氣運

易往而無人

解脱と常樂——『真佛土卷講話』

求道學舎改築趣意書

求道

第拾七卷

第貳號

現代青年の陥り易き思想上の深穽……………(一)

親鸞聖人渴仰の氣運……………(四)

易往而無人……………近角常觀……………(六)

每日曜午前九時

毎土曜午後七時

毎月十五日午前九時慶信會

毎月二十八日午後七時鸞聖會

求道會館

(本郷區森川町一番地)

解脱と常樂——眞佛土卷講話……………近角常觀……………(三七)

毎土曜午後二時

第一一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

求道學舎改築趣意書……………(五西)

現代青年の陥り易き 思想上の深穽

○現代青年が、得て陥り易き、生活上、社交上、要するに思想上の深穽がある。夫れは「見頗る美はしく、眞らしく、しかも善きもの、如く思はれる思想である。たとへば人を愛するとか、親切にするとか、人の爲にするとか、人と和ぐとか、他の爲に働くとか、社會に奉仕するとかいふ思想である。

○言ふまでもなく、争ふとか、戦ふとか、他を制するとか、自我を主張するとかいふ、荒々しき思想が現代青年の思想に適せざる様になりて、如上の温かなる思想が、社會の一般感情を支配するに至りたるは、洵に喜ぶべきことである。何んとなれば、兎に角宗教的氣分、信仰的氣分と接近し來りたりと、言ふことが出来るからである。

○併ながら、眞の徹底したる信仰の立場より見れば、所謂紫の朱を奪ふの習で類似してあるだけ一層注意を怠りてはならぬ。初めより一見誤謬と見ゆるものは、人が見違へることはなけれども、類似したるものは誤りに陥り易いのである。而して其の誤も多少の違なればよけれども、動もすれば其結果全く正反對の方角に迷ひ入りて、深穽に陥り、斷崖に踐みはずすことがないとは言へぬ。

○兎角現代青年の陥り安き思想上の深穽は、一言にして云へば、理想的とも謂ふべきものである。其意味は自分自身では中心より頗る美はしき、眞なる、美なるものと思ふて居るのである、而して其結果は全く反對に陥ることになるのである。たとへば人を愛するとか、

親切にするとか言へば、自身では善なり真なりと思ふのも無理ではない。然れども、何時も吾人が言ふ如く、人間の善でも、真でも、自分を標準とし、起點とし、中心としての善である、真である、即ち相對的のものである。然れども自分では絶對的のものであると、考へつゝあるのである。夫故眞に人に親切にするつもりで、人を煩はしたり、人を愛するつもりで人を戕ふたりすることが多い。特に愛といふ思想の如きは、宗教的の慈愛、人道的博愛といふこと、人間的の偏愛、恩愛、戀愛などいふこと、煩る濫ぎれ安き危険がある。近時社會の表裏に續出する家庭的出來事の如きは、恐くば第一歩の踐み出しが此誤謬より出立したものが多く様である。而して自身が其誤謬を自覺せざるのみならず、世上の評者も區々にして、所見を異にするは、此思想上の陷穽に踐みはづしたものと云はねばならぬ。

○併ながら、最終に至りて見れば、實際上動きが取れぬ様になりて、初めて自己の不完全なることを自覺し、

○上に擧げたる慈愛と愛情とのほきは、かへの如きは、分かり安きことなれども、近時世人に迎へらるゝ人の爲に働くとか、他の爲に奉仕するといふ思想の如きは、容易に自覺し難きものである。併我等の思想は絶對を要求する、書畫の鑒定には眞贋の二者より外はない。信仰の點數は百點か零點である。眞に人の爲に働くとか、他の爲に奉仕するといふならば、絶對に身を捨て自己を犠牲にし、何等名利の念を存せず、自己の貢獻が關から關に葬らるゝも、何等遺憾の念を介在せぬならば可なれども、私自身の經驗によると、此に至りて全く、兜を脱がなければならぬ。此際今迄人の爲めなど考へたことの大それた、空恐しきことに身の毛のいよだつを覺へた。親鸞聖人が「小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ」と仰せられたは全く之が爲である。さればこそ凡愚底下濁惡最下を極言せらるゝ次第である。

○然るに現代思想の缺點は出來るだけすれば夫だけ善

先に眞なり、善なり、美なりと思ひしは、畢竟理想的にかく考へたるまでのこととて、却て之がために自己の虚偽たり、罪惡たり、卑醜たることを自覺するであらう。

——中には最終まで自覺せぬ人もある。併少くとも實際問題として結局頭を下げねばならぬ様になるものである。此場合一刻も早く此の如き虚偽、罪惡、卑醜の我等を悲憫、矜哀したまふ如來の大慈悲、大眞實、大善、大功德に歸入して、此陷穽より免れ出づべきである。

○然るに此に注意すべき思想上の難關がある。夫は此陷穽を免れ出るにつきて、一の躰がある。即ち一旦自分の眞なり、善なり、美なりと考へたるものが、絶對のものでないことを悟りたる時、直に是等の凡てが無價値たるのみならず、寧ろ罪惡、虚偽、卑醜なりとまでは落ちられないものである。何んとなれば絶對に爲し遂ぐることはせずとも今まで成したるだけは善なり、美なり、眞なりと考へて、之を打捨てることが出來ぬものである。

であると、一旦握つたものが、すたらぬのである。聖人は思ふが如く助け遂ぐるものが出來ねば、始終なき聖道の慈悲であるといふて嫌貶せらるゝのである。

○歎異鈔に『凡そ惡業煩惱を斷し盡して後、本願を信せんのみぞ、願にほこる思もなくて、おかるべきに、煩惱を斷じなば、便ち佛なり。佛の爲には五劫思惟の願其證なくやましき』とある。如何にも煩惱を斷じ盡すこと能はずんば、畢竟惡業煩惱の名を免るゝことが出來ぬ。既に惡業煩惱の名を得たらば、いかでか自力修善の假面を保ち得べき。其代りには絶對の慈悲の前には少しも惡業煩惱を憂ふべからず、之を恐るゝは、却て五劫思惟の願を徒勞にすることになる。此絶對の慈悲あればこそ、絶對に惡業煩惱の徒と頭を下げることも出來るのである。聖人が『彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり。さればそこばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさ』と述懐

されたも、一點の善をも認められぬ。我身は現に是れ

罪惡生死の凡夫の自覺が聖人の眞面目である。

四

親鸞聖人渴仰の氣運

○近時聖人渴仰の氣運が社會に勃興するに至りたるは、大に喜ぶべきことである。然れども、聖人の眞面目を得たるもの少きは残念である。勿論見方によりては、兎も角諸方面より聖人を渴仰することなれば、寧ろ大同を取りて小異を問はず、一世の氣運を傾倒すべしといふことも出来る。如何にも一種の運動として見れば、寧ろかくすることが策の得たるものかも知れぬ。併聖人は法然上人門下に三百八十餘人の念佛者を打して一團として、淨土門の氣運を張ろうとは仰せられなんだ。寧ろ師上人の眞面目を得たるもの、僅に五六輩にだも足らざることを警告せんがために、信不退行不退を分かれたたではないか。眞に聖人の門侶たら

んものは、聖人の一點の妥協を許さぬこの眞面目を仰がねばならぬ。
○現代の聖人を渴仰するものは、聖人が人の爲に忍受せられたる行跡を理想として、之を辿りて行はんとする趣がある。是畢竟聖人をはきちがへて、自力修善の陷穽に陥りたるものである。古來妙好人を理想として、同様の誤に墮するものがある。聖人を如來の權化として、我等が其絶對の慈悲に浴するならば、薄に結構なれど、聖人を理想として忍受を實行せんとするものは、現代式に行不退を繰返すものである。三百八十餘人が法然上人を理想として、自力念佛に陥りたる覆轍に陥りたるものと謂はねばならぬ。

○此の如き理想的追求は、絶對に爲し遂ぐること不可能なるは明らかなる道理である。此種の理想家は此點に於ては反對に大膽にも、或程度に於て打切ることとは頗る平氣である。而して其口實に罪惡煩惱を持ち出すのである。しかも或程度までの理想實行は、堅く握りて打捨てぬのである。而して其程度は各自隨意勝手に、出来るだけといふことになり、出来ぬ點は凡夫であるから致方ないといふ、甚しきに至りては免して貰ふ、恕して頂くといふ、此に於て自力作善の理想主義は、極端なる放縱主義、自然主義と妥協するに至るものである。是現代他人の爲に働くことを理想とする人が、自己の生活及行爲につきて、無責任に陥り易い所以である。

○此に於て或者は聖人の名の下に極端なる放縱自然の生活を是認して、聖人の眞面目を得たるかの如き思想上の陷穽に墮する様になる。是我等の惡業煩惱の氷の儘に存在を許して、未だ其氷を融かしむる無碍光の絶

對の慈悲に、浴せざる誤である。勿論言語として、慈悲を繰返しつゝあるのである。然れども唯罪惡の存在を是認するのみにして、罪惡を融かしむる無碍の大慈に、温められぬのである。罪惡の儘といへることは、罪惡自身の氷塊よりは、一點の微温だに出て來らぬことを意味するは勿論なれど、夫程の氷塊も、碍ぐることはざる佛日の照耀のために、氷塊の中心まで慈光徹到して、罪惡の最後まで消滅されることを忘れてはならぬ。御文に『されば無始已來つくりとつくる惡業煩惱を、願力不思議を以て消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退の位に住すとすなり。此によりて煩惱を斷ぜずして涅槃を得といへるは此意なり』とあるが、實に此積極なる信仰の實現である。上記の歎異鈔と對照して、不斷煩惱得涅槃の兩面を味ふべきである。
○聖人の名の世に渴仰せらるゝだけ、吾人は益々聖人の眞面目の渴仰に、力を致さねばならぬ。

易往而無人

近角常觀

六

一 易往而無人

『易往而無人』なる語は御承知の如く『大無量壽經』中にありて、一應の意味は分り易いところの言葉である。即ち彌陀の淨土には往き易くして、而も實際としては、往く人少いとの意味である。併し一寸考えた處でも、往き易ければ多い筈なのに、それが少いと故、言葉としても矛盾があるやうであり。それに一應の意味は分つたとしても、實際としては往く人少いとのこと故、甚だ意味がとりにくい言になつて來るのである。併し私は此頃もこの言葉の意味を味ふに、親鸞聖人の之に對する解釋を伺ふに、如何にも意味深い言葉と思ふ故、少しく之に就て申して見やうと思ふのである。

即ちこの語には、聖人自ら之が解釋をせられたる言葉がありて、その直きくのお示して頂けば、それが語を選んだも、實はこの文全體に就て言はんとするものであつて、併し先づ中心とする『易往而無人』から申して次第にそれに及ぼさせて貰はふと思ふのである。

二 聖人の易往而無人釋

それ故親鸞聖人は『銘文』といふのを書きになつた。『尊號眞像銘文』と云うて、即ち今の聖人の肖像、又は名號の上に、讚文即ち銘文として書きになつた、それらの文の意味を自ら斯うくと講釋して、假名書きにして興へになつたものである。即ち特に銘文として選びになつた、御文類の御釋である。故にそれに今の御文も全體の解釋がされて居るのであつて、先づ今の易往而無人の處丈けを拜讀すれば、

易往而無人といふは、易往はゆきやすしとなり。——宛然小供に言ふやうに、御親切になされてある

——本願力に乗ずれば、本願の實報土にむまるゝこと、うたがひなければ、ゆきやすしとなり。

極樂往生と六つかしきことに言ふも、極樂に往くは六つかしいことと無い。何んとなれば他力信仰上極樂に往くといふと、如何にも極樂往生に目を着けるやうに聞えて、聞きつけの方は何とも思はれぬも、若い方には

明にさせて貰はれるといふわけである。全體この一語丈けて無く、『大經』下卷にはこの前後に猶ほ若干の言葉がありて、聖人はその一聯の語を深く味はれたものと見え、聖人の名號なり、肖像なりの上に、讚文と申し二三の『大經』文が書かれてある中に、常にその一つにこの文を書きになつてあるのである。それは或は十八願文とか、其佛本願力の文とか、それらが決つてお擧げになつてある中に、いつもこの文が、また決つてお引きになつてゐるのである。それは彼の名高い必ず超絶して、去りて安養國に往生することを得、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ。道に昇るに窮極無し。往き易くして人無し。其國逆違せず、自然の牽く所なり。

の文にて、之を深く頂いて行けば、信仰問題として實に極りのない味ひがある。故に題には『易往而無人』のその極樂に往くとは何うか。といふ疑ひが生して來ぬとも限らぬ。その疑ひが來るといふは、『その極樂とは何處に在るか』何うして往くのか』斯ういふ風に考へると甚だ容易く了解されぬことになりて、故に易いと書はれても、甚だ易いに思はれぬやうになるのであるが、

今茲に在る如く『本願力に乗ずれば、本願の實報土に生ること疑ひなければ、往き易しとなり。』——私共茲は淨土とは如何、往生とは如何の詮索のことと無い。佛の恵みの本願力で往かせらるゝの故、往くことは易いのである。東京に居て西洋の地理方を確めて西洋に行くのなら易くは無けれども、船に乗れば船の力てひとりて往かせられて仕まふと同じで、更に適切に言へば、茲は往生極樂の筋道などを詮索することにて、往けることでは無くして、佛の恵み、本願力に疑ひがなくなれば、往生はひとりてに定るのである。猶ほもつと言へば、淨土門はもとより往生淨土が肝腎である。故にそれは字義通り、往生淨土を骨子とする教には違はぬも、それはその考を本として安心をするのでは無い。安心の仕どころは、佛の恵み、慈悲、

といふことに明に夜が明ければ、往生は自から疑ひ無
いことになつてしまふのである。佛の恵みにさへ疑ひ
無くなれば、自然にその本願力に牽かれて、ひとりで
に救はれてしまふの故、實に往き易いのである。

それは往生淨土と言ひても、明に眼の前に佛の姿を
見るやうになり、死後の世界が現前するやうになるこ
とならば、それは容易なことと無い。彼の悪心僧都な
どは日本に於て往生淨土を著しく言はれた人で、此の
間博物館に出てあつた、同僧都の筆になるといふ、高
野山の來迎佛繪圖の如き、私も先達て拜見したが、實
に目も鮮かな面の當り淨土の光景に接するが如きもの
で、故に往生淨土とへば、先づ一般に、その如くこの世
ながら淨土の光景に面接する如き、清らかな思ひに入
ることのやうに思ふが當り前である。處が親鸞聖人は
斯く往生はそのやうなことは仰せられぬ。佛の願力
に救はるゝのが往生淨土である。願力に救はるゝの故、
本願の實報土に往生すること疑ひ無いから、往き易い
といふのだと、仰せられてゐるのである。
然らば無人の方は何うかといふに、
無人といふは、ひとなしといふ。ひとなしといふは、

眞實信心を得る者稀れてある故に、彌々往く者に至つ
ては、甚だ乏しいと言はれて居るのである。

三 『日出て、夜あくるものなり』

處て之れ丈け讀んで左程にも思はぬも、聖人の他
の書き物見ると、そこが猶ほ著しく仰せられてある。
聖人の『化身土卷』には、

大信心海は甚だ以て入り難し、佛力より發起するが
故に。眞實の樂邦甚だ以て往き易し、願力に籍て即
ち生ずるが故に。

大信心海には甚だ以て入り易く無い、佛力より發起す
るのであるが故に。自分の力で起されるのではないが故
に。佛力なるものが加はりて、大信心は起る。加はら
ぬ時には如何にしても信心は起らぬ。

斯くいふ時は益々信心なるものを六かしいものに仕
てしまふかなれども、茲は既に分つて居られる人には
その分つた自家の經驗を以て味つて頂き、又分らぬ人
は彌々六つかしめて得難いと思はれんかなれども、そ
の得にくいのは、我々自分の力で起さうとするから得に
くいのである。自分の力で起される信心では無い、『佛
力より發起するが故に』佛よりいへば、佛の力が加は

眞實信心の人はありがたきゆへに、實報土にむまる
ことまれなりとなり。

一見矛盾のやうであるも、斯く本願力の故に淨土には
往き易いが、その本願力を信ずる眞の信仰を得ること
が、甚だ難いと仰せられてゐるのである。マア忽ちに
してえらい難關が來た。——マア今いふ如く、淨土に
は甚だ往き易い、願力の船に乗るの故。故に聞き慣れ
の人は『果して參れるか、參れまいか』と心配し、又
青年は青年で『果して未來といふものがありや否や』、
斯く疑つて來れば、甚だ六かしいことになつて來るの
であるも、そういふ話では無い。佛願力に夜が明けれ
ばひとりでに往かせらるゝの故、往くことは至つて往
き易い。それは西洋の里程を調べて行くのなら行き難
きも、船に乗れば皇太子殿下の如く、自から行かせら
れてしまふのであるが、然らば残らずが皆な往けるか
といふに、斯く『眞實信心の人はありがたき故に、實
報土に生るゝ人稀れなりとなり』この信ずる一段に至
りては、決して易いとは言はぬ。マア易いといは
れて居て、俄に入口で六つかしきされてしまつた形で、
今迄の易かつたのが詮ない有様であるも、聖人は斯く

れば信心は直に得られるのである。茲は際とい處であ
る。他力故他の佛の力さへ來り加はれば、信心は六つ
かしいことと無い。他の佛の力さへ到り届いて下され
ば、その届いて下された時が、もう信心なのである。

——そこで斯く大信心海には容易に入り難い、それは
斯く佛力により發起するのであるが故に。佛力を蒙ら
ずば、開發することないのであるが故に。言ひ換へれ
ば絶對に私ごとではいかぬのであるが故に。

猶ほ茲て言うてしまふと『口傳鈔』に、聖人親鸞或
る時弟子に對して仰せられたには、

つねにひとのしるところ、夜あけて日輪はいづや、
日輪いで、夜あくや、兩篇汝達いかなかると云々、
折々聖人は斯うした判じ物のやうな問を出し聞き慣
れの者の心を刺激するやうなことを仰せられてあるの
である。之がいつも聖人の説法の口調であられたやう
に拜察さるゝのである。そこで弟子が何氣なく、夜が
明けて日輪が出来ますと答申上げると、
上人のたまはく、しからざるなり。日いで、まさに
夜あくるものなり。

聞いて見ればその譯けてある。故に信仰得るは難いと

いふば、我々の心に信心の夜が明けると、佛日の日輪は拜まれるのだと思ふからであるが、信心の夜が明けられるは佛の力、佛日の日光が我々の心に射込んで来て下されるから夜が明けるのである。即ち我々の無明黒闇をち見捨てなき佛の心が、無明黒闇の我々の心に、初めて届いて下された時が信心故、それ言ふために態々斯ういふ問を起して来て、お示し下されて居るのである。

處が誰しも斯ういふ風に聞かれると、それは夜があけて日が出ると、一寸答へ度くなると同じやうに、大抵は『この信心さへ起せたら』も少し喜べたら、『有難くなつたら』と、大抵が心の夜が明けさへすれば、佛日の日光は拜まれる如き思惑を持ち居るのである。それは闇は何程明るく仕やうと思ふても、闇を闇みが明るくすることは出来ぬ。偶々蠟燭をつけても蠟燭の火は忽ち消えてしまふと同じに、我々主觀に於て、或は喜ぶのだとか、念佛稱えるのだとか、又は佛の恵みを心に描き、なだらかに暮すのであるとか。然ういふことは何程繰返しても皆な一時で、忽ち皆な消え去つてしまふのである。

自分^〱の^〱ことを^〱思^〱う^〱て^〱、^〱下^〱さ^〱る^〱と^〱、^〱何^〱程^〱皆^〱様^〱が^〱想^〱像^〱て^〱思^〱は^〱れ^〱て^〱も^〱、^〱そ^〱れ^〱は^〱結^〱局^〱想^〱像^〱で^〱、^〱然^〱う^〱自^〱分^〱の^〱心^〱に^〱繪^〱を^〱書^〱い^〱て^〱、^〱思^〱う^〱て^〱居^〱ら^〱る^〱、^〱丈^〱け^〱の^〱も^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱故^〱に^〱、^〱そ^〱う^〱い^〱ふ^〱もの^〱の^〱ら^〱ば^〱忽^〱ち^〱あ^〱と^〱戻^〱り^〱が^〱し^〱、^〱消^〱え^〱去^〱つ^〱て^〱仕^〱ま^〱ふ^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱。處^〱が^〱一^〱枚^〱の^〱葉^〱書^〱、^〱一^〱音^〱信^〱の^〱電^〱報^〱、^〱或^〱は^〱故^〱郷^〱より^〱來^〱る^〱人^〱に^〱托^〱し^〱て^〱の^〱一^〱言^〱の^〱傳^〱言^〱に^〱し^〱て^〱も^〱、^〱親^〱は^〱斯^〱く^〱〱思^〱う^〱て^〱居^〱る^〱から^〱、^〱直^〱き^〱〱小^〱供^〱に^〱會^〱つ^〱て^〱言^〱う^〱て^〱呉^〱れ^〱、^〱と^〱あ^〱つ^〱た^〱なら^〱、^〱そ^〱れ^〱を^〱聞^〱か^〱さ^〱れ^〱た^〱時^〱が^〱、^〱初^〱め^〱て^〱親^〱の^〱思^〱召^〱を^〱聞^〱か^〱さ^〱れ^〱た^〱一^〱念^〱で^〱、^〱そ^〱れ^〱聞^〱か^〱さ^〱れ^〱た^〱時^〱に^〱は^〱『如^〱何^〱に^〱も^〱親^〱の^〱思^〱召^〱は^〱分^〱り^〱ま^〱し^〱た』と^〱、^〱一^〱邊^〱に^〱親^〱の^〱思^〱召^〱の^〱程^〱は^〱諒^〱承^〱さ^〱る^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱。故^〱に^〱信^〱仰^〱は^〱此^〱方^〱より^〱佛^〱の^〱心^〱を^〱想^〱像^〱し^〱、^〱考^〱察^〱し^〱て^〱、^〱喜^〱ん^〱だ^〱り^〱、^〱有^〱難^〱く^〱思^〱ふ^〱こ^〱と^〱で^〱無^〱い^〱。面^〱の^〱當^〱り^〱親^〱の^〱心^〱の^〱有^〱り^〱な^〱り^〱を^〱言^〱う^〱て^〱聞^〱か^〱さ^〱れ^〱、^〱取^〱り^〱次^〱が^〱る^〱、^〱が^〱故^〱に^〱、^〱そ^〱れ^〱聞^〱か^〱さ^〱る^〱、^〱と^〱聞^〱其^〱名^〱號^〱信^〱心^〱歡^〱喜^〱て^〱、^〱言^〱う^〱て^〱聞^〱か^〱さ^〱る^〱、^〱か^〱ら^〱分^〱る^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱。故^〱に^〱他^〱力^〱に^〱於^〱て^〱は^〱言^〱う^〱て^〱聞^〱か^〱さ^〱る^〱、^〱惠^〱み^〱の^〱御^〱趣^〱意^〱を^〱聞^〱く^〱とい^〱ふ^〱こ^〱と^〱が^〱、^〱最^〱も^〱肝^〱腎^〱と^〱な^〱つ^〱て^〱ゐ^〱る^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱。處^〱が^〱今^〱日^〱て^〱は^〱そ^〱れ^〱が^〱言^〱葉^〱慣^〱れ^〱し^〱て^〱、^〱聞^〱く^〱とい^〱つ^〱て^〱も^〱何^〱か^〱事^〱の^〱筋^〱道^〱、^〱講^〱釋^〱で^〱も^〱聞^〱く^〱こ^〱の^〱や^〱う^〱に^〱な^〱つ^〱て^〱居^〱る^〱の^〱で^〱あ^〱る^〱が^〱、^〱然^〱う^〱て^〱無^〱い^〱。斯^〱く^〱苦^〱惱^〱の^〱舊^〱里^〱に^〱迷^〱う^〱て^〱居^〱る^〱に^〱對^〱し^〱、^〱親^〱よ^〱り^〱遣^〱る

彌々本統に夜の明け渡るは、日輪出づれば夜は全く明けはなれる。日輪出づれば如何なる闇も、忽ち一度に明るくされて仕まうのである。このことは『執持鈔』の中にも言はれてあつて、そこで斯く自分が起される信心で無いから、信心は全く佛力の現はれに外ならぬのである。

四 親よりの傳言を聞さる時

處でいつかも或る信心得やう〜で苦しんで居る人にこの話したら、『それならその日輪はいつ出ますか』と、泣いて訴へられた人があつた。『此方から努めて得られる信心なら、如何程でも苦心も仕やうが、先方から來ねば分らぬのなら、仕やうが無くて全く困る。それならその日輪はいつ來ますか』と、歎き悲しんだ人があつたのであつた。そこで然ういふ方の爲にはその夜があけるやうに、その日輪を此方からよく言うて聞かして上げなくてはならぬ。即ちそれが『其の名號を聞く』といふことで、そこになるとその日輪を此方からよく取次いで、お聞かせするといふことが、一番肝腎になつて來るのである。

それは故郷に在る親を皆様が東京に居て、親は斯く

瀨無き憐愍を加えて下さる、その親よりの直き〜の勅命を聞くのである。故に他方の教は、この苦惱に夜のあけやうのない人生にとつて、極めて著しきこと、なつて來るのである。故に平日本願名號といはれても、左程にも思つてゐぬのであるけれども、斯くこの著しきことが人生に起つて來る、その根本親心が本願名號といふことで、之を外より聞かせられ、傳へられぬ時には信心は起らぬ。之を聞かせらるゝが故に、初めて、先方の信心の程が分り、徹し、即ち真心徹到の處に信心は現はれて來ると、斯ういふことになるのである。そこで斯く自身で起さるゝ處の信心でないから、『大信心海には甚だ以て入り難し』、『佛力より發起するが故に』で、言つて下さる處の思召を聞くこと一つが肝腎となつて來るのである。故に佛力を加えらるゝにあらずば逆も起りやうはない處の信心であるが、さて一度それを聞かせられ、加えられ、ば『願力に籍つて生ず』るのであるが故に『眞實の樂邦には甚だ以て往き易し』と、斯ういふことになるのである。

五 『眞實の信樂獲る』と難し

猶ほもつと聖人の語には著しいのがあるから、それ

を言はうと思ふのである。それは『信卷』とて『教行信證』中、最も肝腎な信仰を説かれてある處の卷に、而も開卷すぐの處の言葉に、それが漢文である爲め人は左程にも氣がつかぬのであるけれども、

然に常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成し難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。――

『常没の凡愚』は常に沈みづめの我々凡夫愚人。『流轉の群生』は我々迷ひの衆生である。それが無上妙果の證を開くことが困難なのでない、眞實の信樂を獲ることが難いのであると、茲聖人の斯くいづも同じ言ひ方になつて居るのである。處て眞實の信樂を得ること、言ひ換へれば眞實の如來の信心が徹するといふことが、難いのであるが、そのわけは、

――何を以ての故に。乃し如來の加威力に由るが故なり。博く大悲廣慧の力に因るが故なり。

何氣なく讀んで仕まへばそれまでであるも、何故斯く難いかといへば『乃し如來の加威力に由るが故なり』で、佛より威力を加えらるゝのによりて信仰は起る、威力を加えらるゝのが分らぬことには、信仰は體得されぬ。又『博く大悲廣慧の力に因るが故なり』で、如

來大悲の智慧の力を加えらるゝのによりて信仰は起る。廣大な智慧の力を加えられるので無い限り、信仰は體得されぬ。すると大變六つかしきことになつて來たかに考えらるゝのであるも、六つかしいことでない。その廣大威神力、智慧力を加えられるのであることさへ分れば、――言ひ換へれば、如何なる闇をも限なく照らす日輪の眞實であることさへ夜があければ、信仰は易いことなのである。去りながらその先方の御眞實に本統に夜があけたてない限り、何程闇の中に蠟燭を點さうが、無理に明みをこしらえて喜ばうが、それは結局一時のこしらえ物とのことである。茲は信仰問題として氣をつけんならぬ處で、――

マア今日世間普通では信仰と言へば『有難く思ふことである』美はしく喜ぶことである『恵みに満足して暮すことである』と考へて、そうして何程それを目標として、此方より佛の恵みに有難く感涙をこぼし、目に佛の姿を見、面の當り極樂の様現前するまで進んでも、それが結局自分ごしらえの、手作りの信仰に過ぎぬとのことである。然らば眞實の信仰とは何うかといふに、それまでに清らかに、理想的に爲しあげても、

それが結局手作り故忽ちにして碎けて仕まひ曇つて仕まふところの、仕方のない暗黒の我々である。然るに彌陀佛日の日輪の光は、その仕方のないを哀れみ、その暗黒をこそ何處までも照らさんとの眞實の慈悲の光である。この彌陀佛日のお照らしを蒙るて無くては我々のこの暗黒の夜のあけやうは無い。そこで斯く我々のこの暗黒を哀れみ、之に飽く迄加へて下さる恵みの力一つで夜は明けさせて下さるの故、之が『乃し如來の加威力に由るが故なり。博く大悲廣慧の力に因るが故なり』である。

――遇淨信を獲ば、是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず。

之は聖人の言葉にはよくこの『遇』がある。有難い語で、遇然の遇の字がこの『たま』である。も一ついへば道にて人に遇ふの『遇ふ』の字で、天親菩薩の『淨土論』には、

佛の本願力を觀はすに、遇うて空しく過る者無し。

この『遇ふ』である。遇ふは思ひがけなく道にて人に行き遇ふ、偶然、たま／＼遇ふので、佛の恵みに我々遇ふのは何うかといふに、我々の方より望み求めた爲に

遇ふので無い。我々の方は暗黒の中に行方も知らず悩み迷うて居るのを、佛の方より飽くまで捜し求めて下されて、何處までもこのお見捨てなき御念力一つで終に夜をあけしめて下さるの故、遇ふは恵みの力一つで遇はしめて下さるのである。故に思ひがけなく、たま／＼遇ふことを得るである。何んだか今度の話は、之より得やうとする方には、唯やたらに／＼立てるやうな話になつて仕まつたのであるけれども、そこで斯くひと度出會はしめられて見れば『是の心顛倒せず是の心虛偽ならず』――自ら喜んだり、作つたりしたのならば、顛倒したり、剝げるといふことはあるも、眞の恵みに行き遇つたのなれば、もう二度と之が碎けるといふことはない。

――是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るなり。(己上)

永劫不壞の眞のお恵みを獲て、極惡深重の衆生が眞實の大慶喜心を得、諸の大聖方の重々の慈愛を蒙る身となさじめられると、斯くの如く仰しやつてゐるのである。之が聖人の、而も『信卷』の初めに言はれてあるお言葉である。恐らく聖人の信仰に行かれた御自身の味

ひを仰せられた言葉だらうと思はせて貰ふのである。而もその在り所が彌々『信卷』の筆を起して、之より大信心を説かれやうとして、この心は至心信樂の願から出たと書き出して、また十八願の文や、願成就の文をあげさせられぬ前にお書きになつてあるのである。

六 信ずるとは如何の状か

以上は文ばかり申して却て分りにくく仕て仕まつたか知れぬなれども、そこでマアこの結局は何ういふことになるか。その言はるゝ廣大加威力、廣慧力とは何ういふことになるか。聞くとは如何なることを聞くのであるか。之が結局の處となつて來るのだらうと思ふ。そこでそれは先きいふ面の當り親の心を取次いで、言つて聞かして呉れる處の人が、親はあゝいふ具合、斯ういふ具合と話して呉れる、それ聞けばよいこととなつて來るのであるが、併しそこには一つ皆様の疑ひの出し易い處を察して申上げなければならぬ處がある。

斯ういふことは皆様の間にはあるまいけれども、初心の人にはよくある疑問なのである。それは『何程恵みのことを人が取次いで聞かして呉れても、それが直に如來の勅命と聞かれなければ信仰にはならぬの故——

が實は斯うくと話して呉れたとして、我々それ聞いた時信ずるは、それが嘘であるとか本統であるとか、然ういふことと信ずるのでない。極端にいへばその傳言いうて來てる人も、何を言つて來てるのだから、意味分らずに言つて來てるのかも知れぬのである。『此の間のことは斯うなつたから』と、言へと言はれて譯け分らずに、言つて來てるのかも知れぬのである。けれどもそれ聞かざるゝと信ずるは、その言つて呉れることに小供の心に貫徹せんならぬ譯けがあるから、それ聞かざるゝと信ぜずには居れぬのである。即ちそれには親が自分のことを思つて呉れるまこと心が、恰も我々冷たい水にあたれば『冷し！』となり、火に觸るれば『熱し！』となると同じやうに、直に子供の心に直覺的に『あゝ有難い！』と響く處があるから信ずるのである。故に茲は『あの人は嘘いはぬ人だから信ずる』とか、『あの話は間違ひないやうだから信ずる』とか、そうした迂遠いことと信ずるのでは無し。

マア入らざることを言ふにも及ばぬも、御承知の如く今日は佛教の研究にも、種々語學上よりなどもいはれるやうになりて、全體淨土教は何の時代に於て起つ

處が人の言つて呉れることは、今日斯うと聞かされて成る程然うかと思つて居つても、明日それは嘘であるといふ人が出て來れば、忽ちそれは引くりかへされて仕まつたの故——故に然ういふことを言つて聞かされても、それをその如く信ずる丈けは、此方で信じなければならぬのであらう。信ずる丈けは此方の働きてしなぐてはならぬのであらう。』と、斯ういふことがよく出て來る疑問なのである。すると茲はもつと根本的に、具體的に言つて來ねばならぬとなるのであるが、——それは昔の人は茲で御經を捉えて、『御經に書いてあるから、——』と、御經に書いてあるを何よりの據所として來たのであらうが、今日の人となると、御經だとして俄に信ずるわけには行かぬのである。それは御經とあれば直に佛の直説と受けられぬでも無いが、併し御經編纂の年代までが問題とされて居る今日となつては、御經とて俄に信ずることは出來ぬといふことも言へるのである。故に『親がそういふ心であるから、——』と、そんなよゝ加減なこと何程言つて聞かして呉れたつて』と、いふことも言へば言へるのである。處がマア今日我々東京に居る處へ國許より人が來て、貴方の親

て來たか、などの研究も色々言はれて居るのである。故に淨土教の發達——發達といふものを、かしいが、或はそういふことも言はれるのであるのかも知れぬ。去りながら、我々の聞くのは、『御經』の文學は何の時代に起つて來やうが、また如何にして淨土教は日本で發達して來やうが、そういふ來歴を聞いて安心をするのでは無い。彌々の處は仕やうのない私に、言つて聞かざるゝ恵みの眞實を聞いて、それが親の傳言に接した時疑ふに疑へぬと同じやうに、直に私共の心の上に響く處があれば、もうそれが活きたことなのである。マア喩えば『之は火といふものである、火は熱いものである。どうだ、そら熱いだらう』といはれて、『成る程そういふ熱いものか』と分つたのが火が分つたので無い。與へられるものが本統の火なれば、火は一邊に直覺的に、『あつ！』となつて仕まつたのである故に佛の本願力威神力といふことも、それと同じに、それを加へられれば、聞かされた一念に『あゝ有難い』となつて來るのである。故に『有難い』の一念が起るのは、『何ういふ人が言ふたから』の、『斯ういふ風に言はれたから』のと、然ういふ道理を屈て分るのでは無い。

處が從來の説教聞いて居る人に、本統に火に熱くされて居る人が尠いのである。極言すれば火は熱い物だと聞かされて、『ウン熱い！』と、之に聞いて居る人が、比々皆な然うなのである。恰も學校教育に於て忠とは斯ういふもの、孝とは斯ういふものと、道理筋合で聞いて居ると同じになつてゐるのである。宗教が之になりては面白くない。處が氣づかずにて進んで居ると、火は熱いものだと言はると、本統に熱い如き思ひを仕てしまつて、それで猶ほ進んで行つてしまふのである。故に随分信者の人の間には、自分の主觀から進んで行つた信仰で、相當深い處へいつて居る人がある。それが眞實の信仰の如くに、自分でも思ひ易い。マア早い話が皆様が講話聞いて居る間は氣持ちがよいと仰しやるは、悪くはないやうであるけれども、その裏は、聞かぬと居る間は氣持ちが悪いとなつて居るの故、矢張り之が主觀から出た一種の修養となつてゐるのである。故に然ういふ風に此方の思ひを積んで行くことも、相當深い處に到れぬとは限らぬのであるけれども、それが結局こしらへた物故、時來れば殘念ながら、皆な碎けてしまふ、と斯ういふこと

の人と、この二種があると仰しやつて居るのである。即ち二様の修養の方法である。處でこの冥想的の方の人は、その方法で何處迄も高尚に進めて行くことが出来る。また實行的の方の人は、實際に家をも身をも投げ捨て、人の爲め／＼と、何處までも實行してゆくことが出来る。即ち之が定善、散善で、之は何うかといふに兩方とも決して斥く可きで無い、賤む可きでない。がこの定散二善の、人間の修養により行く方の行き方では、必ず時ありてあと戻りがし碎けてしまふとである。故に『觀經』に定善十三觀、散善三福九品が言うてあるけれども、それが『觀經』の本意かといふに、否、それは然ういふ冥想的の人を、また活動實行の人を導く爲めの然ういふ修養方法であつて、彌々となればそれらは皆な碎けてしまひ、残るは仕やうやうの無い、全く暗黒のものとの私であると、聖人は斯く仰しやつて居るのである。聊か斯うなると殘念な思ひがする程であるけれども、——併し茲は聖人の斯ういはれた、あゝいはれたよりも、銘々の實驗で味はせて貰はねばならぬから、先づ私としては私の經驗した處で、言はせて貰はふと思ふ。

になるのである。そうしてその碎けた時には、今度は全然失望せんならぬと、斯ういふことになつて來るのである。

七 定機、散機

我々が色々の方法で、心に作り喜んで居つたものが碎けてしまふことは、常に經驗する處であるが、そればかりでなく、我々が理想を立て、眞地目に實行し努力して行く方の行き方も、又碎けてしまふ時が出て來るのである。之は信仰問題には關係なく、寧ろ修養に涉る方の話であるも、
『觀無量壽經』には人間の心を二つに分けて、定機、散機といふことを仰しやつてゐるのである。『定』は心の靜かなる方の人。『散』はちるて『心の落ち着かぬ』と取る時は惡しき方に開えるも、その意味ではなくて、茲は實行的活動の方の人のことである。之に對して『定』は即ち冥想的傾向の方の人。即ち詩的に、文學的に、宗教的に、哲學的に、心を靜めて冥想して行かうといふ側の人と、『自分は斯くの如く實行して行かぬばならぬ』人には飽く迄も親切に、何處までも行ひ正しく』と、何處までも實行に心を寄せて行かうといふ側

八 私か定散の經驗

それは平日御承知下されてある處であるも、マア私共人間が定機散機と申した處が、定ばかしの人間もななく、散ばかしの人間もなく、如何な冥想的の者と雖一方には實行的の方面を具へて居るの故、一概には言へぬのであるけれども、先づ私として冥想的にお慈悲を喜んだといふ方よりいふ時は、私は學生時代に於ては淨土のことなど、全く經文通りに心に描いて、寧ろ頑固なる淨土論者であつたものであつた。我々が經驗せぬからというて、無いとは言はれぬと主張して、隨分淨土を有難がつた方なのであつた。すると友人共は『そんなら地獄はあるのか』『ある』『それなら鬼は居るのか』『居る』『そんならその鬼は虎の皮の禪しめて居るのか』など、冷かし／＼したものであつた。それ程冥想的に心に描いて喜ぶ方もやつたのであつたが、併しマア當時の私共の頭には、是非この佛教を振興せしめなければの考があつて、寧ろそれ一まきであつたやうなのである。即ちどちらかといへば、實行活動の方に力入れて居つたわけである。そこになると『設し人は何うあらうが、自分丈はこの佛教の爲にせんけれ

ばならぬ『イヤ學問をするのも宗教の爲め、あれをするのも信仰の爲め』と、それて遣つて〜やり抜いて、時には随分苦しい思ひをもちして、やつて居つたわけである。そして何う考へて居つたかといふに、『自分は兎に角宗教の爲め斯く身を犠牲にしてやつて居る、献身的にやつて居る。故に之で相當自分としてはやつて居る』と、斯く考へて居たのである。

處がそういふ風に理想的に活動實行と、それて遣り抜いた結果が、最後に何ういふことになつて来たかといふに、最後に私の氣のつき出したことは、それまでにやりても必しも人は正當に理解して呉れるものでなく、また自分ではそれが本統と信じてやつて居つても人は必しもそれを善いとのみ認めて呉れぬ、誤解される場合も甚だ屢起つて来る。——茲が皆様からよく聞かれる問題であるが、マア皆様のことは措いて、然らなると、もう私自身が、今までのやうな心持ちではやつて行けぬやうになつてしまつたのであつた。何だか俄に人が慨歎すべきであるやうになど思へて来て、茲で色々變な思ひが起つて来たわけである。その時の私の心持ちを一言にいふと、そのやうに色々人を悪しく

と、先きいふ佛の本願、親の傳言といふことが意味を明になしにくい。さて斯く自分は今迄善くしてゐると力んで居つたのに、その善くが甚だ善くないものであつたと碎けてしまひ、また今まで自分は善く、人が悪く、と思つて居つたのに、そのやうに自分を善く人を悪く、と思つたのが虚事であつたと分つて来れば、最早や我々の心に思ひと思ふこと、一つとして成り立ちやうがなくなつてしまふのである。

九 思想混亂の原因する處

ちと話が散漫になつて来るかなれども、斯ういふところが人間の統の問題故、よく皆様の實際生活に就て考へて見て頂き度いのである。家庭問題といへば小問題である、私の如く宗教の爲めといへば大きく聞えるかなれども、私共一家の爲にあゝ斯う苦勞して『自分はこのやうに忍耐して居る、家の爲に犠牲的にやつて居る』と、我々之でやつて居ると考へて、必ずそこには自分が善くして居るとなれば、人の方が悪いといふ考が這入つて居るのである。自分は斯のやうに善く仕居るに、人が可かぬといふ心持ちが潜んで居るのである。猶ほ進めていへば、その善くがその人では自分

思ふ心が私の心中に群り起つて来る、それを我ながら甚だ不満足に思つたことだつたのである。それはそのやうに人が理解して呉れぬからとて、人を不足に思ふ心が起つて来るは、それでは身を捨てて、犠牲にしてなと言つて居つたのであるも、少しも自分が捨てられてるのでない。初めから人に見て貰ひ度いため、人に賞めて貰ひ度い爲めにやつて居つたのである。それは成程或る時は親をも捨て、學問も捨て、一身を差し出してやつて居つたのであるも、あとでそれだけ自分がやつたことを人から認めて貰へぬとなると、甚だ報いらぬ思ひが起つて来て、そして然ういふ思ひが起つて来たとする、それが残らず人に認めて貰ひ度いが根本で、やつて居つたに外なら無つたと、斯く茲に一旦氣がつき出して来たなら、今まで自分の善いと思つて居つたものに、一つとして本統の善いはなく、残らずが皆な自分の名譽心の爲めであつた、人に善く思はれんが爲めであつたと、斯ういふことになつて来たのである。茲はその人〜で、必ず言へる處が出て来るのであつて、即ち人間の兎や角の問題は、必ず茲に歸着して来るのである。故に茲を一つハッキリして置かぬ

の方がよく、人の方が悪いとなつて居るのであるけれども、反對の方の人からは、またその人で自分の方が善く、人の方がいかに可かぬとなつて居るのである。即ち善くは銘々勝手に自分だけ思つて居るのであつて、人からはまた人の方がよく、此方の方が悪いとなつてゐるのである。これは今日の思想界の争ひの問題にしてからが、皆な之になつて居るのであつて——

ちと言ひ過ぎるかなれども、全體我々が社會の爲に働くとか、正義の爲に奮闘するとか、宗教の爲に骨折るとか、それが皆な自分では、自分離れた積りてやつて居るのである。誰とて自分の名譽心を満足させる爲に、やつて居らうなどは思つて居らぬ。處が最後に彌々それが續かなくなりて、人に不足が出るやうになりて、その『盡くして居る』善くしてゐるが、『自分は斯んなに善くして居る』の善くしてゐることが分つて来るから、茲で何人も自分の善くが碎けてしまはぬはないとなつて来るのである。ちと著しき例出すも、——我々が國家の爲め戦ひに出て、身を犠牲にするは悪くは無けれども、爾らば眞に國家の爲に仕て居るのかといふに、爲に名譽とか行賞とかの場合になりて、隨

自分自分の爲めを言うてる人が幾らもある。故に今まで國家の爲になど偉そうなことを言うて居つたも、それが結局自分の爲めを言うて居つたものであつたと、茲で自覺に出るなら結構であるも、『自分は斯れ程よくして來た、盡くして來た』をいつまでも言うて居るとすれば、思想的には随分をかしげなことである。マア我々の『國家の爲め』『何々の爲め』は、氣をつけぬとそういふ言葉の下に、自分の爲めを言うてるのである場合が極めて多い。すると今まで『國家の爲め』で、道德の基本を立て、居つた處に、その『國家の爲め』が碎けて來るとなれば、道德の基本が立たなくなるではないか。即ち今日の如く思想界が混亂して來て、今日までの道德では纏りがつかなくなつたは、私はその如くなつたをよいとは言はぬも、そうなつて來た丈けには一つの理解丈けは持たなくてはならぬと思ふのである。それは私自身が今まで善いと信じて居つたものが、それが残らず自分の爲めから出て居つたものであつたに氣がついた經驗からすれば、そこは私にはわかるわけである。之は少しく思想界に涉り過ぎたかなれども、兎に角從來我々の言うて居るものが、必しも本統のもので

ないこと丈けは之で分つて貰へやうと思ふ。

一〇 信仰問題になるかならぬの分れ目

併し茲で要點を逸せぬ爲めに、——
私はそれ程『自分は眞地目でやつて居るに、人がいかに』と、之が起つて來たのであるも、若し茲で『だから自分が正しくて人がいかぬのだ』と、之で突張つて仕まつたなら、それは社會問題、政治問題、勞働運動とはなつたかも知れぬ、信仰問題とはならなかつたのである。處が私のは、斯く自分をよく、人を悪しく思ふ心の起つて來るは、そういふことを思ふ自分の心の方が善くないと、之になつて來たのであるから、茲が肝腎である、眼目である。信仰問題は自分の問題たることを忘れてはならぬのである。自分の問題といへば、必ずしも生命が畢る時の問題ばかりを言ふのではない。斯く自分は善くしてゐるに、人が可かぬの問題も矢張りそれである。處が斯く自分を善く人を悪しく思ふ心が止まぬ故、いつ迄も人に善し惡しの問題がやまらぬとすれば、——も一ついへば自分は献身的に犠牲的と言ひつゝ、『人が悪い』となつて居るのは、人が悪いからの問題で無く、大に人に見て欲しいもの

を自分が持つて居るからの問題である。されば人に不足を思ふは、人が悪いよりも、然ういふ心を持つて居る自分が悪いの問題であるとすれば、もう茲で斯く自分が悪い儘では仕やうが無い。即ち初めにいふ『大經』文に、『必ず超絶して去りて安養國に往生することを得』とある、この超絶して去ることが必要となつて來るのである。それは信仰問題の要は、『人があゝ、自分が斯う』といふ如き、人間あゝ斯うの問題で安心されるので無く、そういう人間といふものを超絶して安心するのでなくては、本統に安心されるものでない。それは今言ふやうに、初めは私が人に不足を思つて居つたのであるも、あとで氣がつけば、然ういふやうに人を不足に思ふ根性が私の心中にある限り、不足といふものは止むものでない。茲は氣つけんならぬ處で、私共人生或る事件に出遇つて苦しめば、その事件さへ終れば苦みは止むものと思つてゐるのであるけれども、ナニ決して止むものでない。人間争ひ心のある限り、善し惡しの苦惱は永久止むものではないのである。マア大分話が細かくなつて來た。

そこで斯く私は、初めは人に何う斯う思つて居つた

のであるけれども、そのやうに人に認めて貰ひ度いが爲に人をあゝ斯う思ふは、思ふ自分の方が善くないのだとなつて來た。さすれば今迄自分は善く仕て居たと思つて居たは、本統に出來て居たので無く、それは斯く人に認めて貰へぬとなつたら、人に不足が出て、もう出來ぬやうになつて仕まつたの故。さすれば今迄人が見て呉れる、見て呉れぬに係はらず、出來ると思つて居つたは皆な嘘で、それは斯く人に見て貰ひ度いが爲めの、善く思はれ度いが爲めの、名利の爲めの善だつたのである。そういふ此方から仕た丈け人から仕て貰へぬば満足されぬの善ならば、そんなものは本統の善といふことは出來ぬ。そんなものなら五分々々のものに過ぎなかつたのである。五分々々のものなら絶對といふことは出來ぬ。然らば然ういふ自分は如何にしてよいかと、斯ういふことになりて、茲で私は今までの定も散も、冥想も實行も、一つとして碎けて仕まはぬはなくなつて仕まつたのである。すると今まで自分は善くして居ると思つて居た丈け、よけ惡かつたといふことになつて來た。それは宗教とか理想とか、平素喧かましいこと言うてる者程自分ばかり高い處に上つ

て人を見下して考へて居る。それ丈けいけなかつたと
氣がついたら、よけ顔向けならぬことになつて来て、
私の苦しかつたのは茲だつたのであつた。大方『あの
やうな奴はいかぬ』と人が言うて居るであらう。『あの
やうな奴には齡するも耻ぢんならぬ』と言うて居るで
あらう。言うてる自分の心も改良すること出来ないて
宗教を改良せんならぬなど言うて居たは全く自分が悪
かつた。すると斯くの如く自分がいかぬ、と、いか
ぬばかりになりて来て、茲で何う仕やうも無く、全く
私は行き詰つてしまつたのであつた。

一一 最後に私の心に現はれたことは

そこで茲で先きいふ本願をいふことになるのである
が、本願の言葉は先づ措き、その私が何によりて安心
することになりたかといふに、茲になるともう私が悪
いばかり故、悪いばかりして私が安心して居るわけに
は行かぬ。そこで私が何ういふことを望むやうになつ
て来たかといふに、そこは皆様も茲で何ういふ方角に
出たら、その我々が救はれる道があると思はれるか。
マア皆様にしても以上言ふ處で、兎に角我々自分々々
が悪いのである丈けは諒解して下されたらうと思ふ。

を凌ぎ、我慢張る心が起きて来て、管に自分が柳にな
れないばかりで無く、柳の人に對しても此方からは疑
つて掛り、隔て、掛り、何處までも喧嘩して行く根性を
持つ自分であることが、段々彌々明に分つて来たので
ある。さすれば然ういふ根性の自分が、何うしてよい
かとなりて、茲はもう五分々々の世では解けぬ。
若し之が五分々々の世で解けるなら、人生佛の恵
みは入らぬのである。そこは小は家庭問題、友人間の問
題、大は思想問題、國際問題に至るまでが、日本が何
う斯う、亞米利加が何う斯うとなりて、人生いつまで
もこの五分々々で解けやうがないのである。故に然う
いふ自分が如何にすれば安んぜられるかとなりて、私
は何とかして無我になりて、柳になりてと、努める丈
け努めたのであるけれども、終にそれが出来無いとな
りて、最後に私の心に現はれて来たことは、――
私は無我になり度いが、如何にしてもそれがなれぬ
のであるが、なれぬのは五分々々の性分の人間なから
である。若しや世の中に、これまでに私が疑ひをとり
度い、隔てを止め度いと努めても、止められぬのは私
が然ういふ生れつきの人間として、仕方がないことで

さすれば少くも皆様が斯うは考へられるであらうと思
ふ。それは『人を悪しく思ふ心さへ自分に無くなれば
如何なる時でも不足なく暮らされる道理故、結局人を
あゝ斯う氣に病む心さへ無くされればよい筈である。
設し人は如何なる心で我に向つて来やうとも、それを
此方に於て氣に懸けぬ心にさへなり得れば、――それを
に取り合はぬ心にさへなり得れば、――即ち柳に風の
心、暖簾に腕押しに心にさへ成り得れば、人間あゝ斯
うの争ひは、無くされる筈である』と。

處が私の心が柳で無いのである。先方が風なれば此
方も風、先方が腕づくなら、此方も腕づくなのである。
否、も一歩進めれば、先方は柳、暖簾の人に對しても、
此方の向ふ風の心が強い故、柳の人をも風にさせて仕
まふ心を持つ自分であることに、氣がついて来たので
ある。『イヤそれ程悪いとは自分は思はぬ』と言はれる
かも知れぬも、然う思はれる人には、茲は殊によく氣
をつけて貰はんならぬ。故にこの時此方が柳になれ、
暖簾になれ、無我になれ、ばよいことは分つて居るの
であるも、それが如何にしてもなれぬのである。それ
はならうとする心の下から、忽ち『自分か』といふ、人

あると、そこを理解して呉る、人ありて、『成る程君
の止まないのは無理がない。それは然ういふ性分の人
間として仕方がないことであることを我はよく了解す
る』と、この私の出来ぬ處を察して呉る、人あらばよ
からうと、斯ういふことになつて来たのである。之は
此方が隔てが止み、我慢がとれ、ば事は無いのである
けれども、斯く如何にしても止められぬとなれば、『止
めぬ者はいかぬ』と言はるゝばかりしては私がもう仕や
うが無い。『成る程君の止めやうと力めたことはよく分
つてゐるも、如何せんそれは君の性分が止められぬの
故、我は寧ろそういふ君の止められぬ處に同情する、
理解する』と、斯う言うて呉れる者があればよからう
と、斯ういふことになつて来たのである。茲はたつた
一言であるけれども、茲が信仰問題として絶頂に達し
て居る處故、軽く聞いて貰つてはならぬのである。

一二 『悪しくてもよい』では安心は出来ぬ

全體今まで他方を聞く者が、茲で軽く聞いてしまつ
て、『我慢がありてもお助け、悪うてもお助け』と、之
に聞いてしまつて居るのであるけれど、そういふこと
で茲が安心されるものでない。然ういふ聞き方なら、

茲て必ず『も少しは善く出来さうなもの』と、之が起つて来るに決つて居るのである。そこになれば、マア私にすれば、この時私が我慢がやみ、隔てがなきに行ければ、それが私には一番安心なのであつた。故に何とかしてそれに行き度い／＼と、それに苦むこと私は半年、一年近く。それはそれにさへなれれば私が平和にゆける、そこまでは私が見えて居たのであつた。マア私のは初めはそれが自分に出て居た積り、二番目には出来て居るのに人が認めて呉れぬと不足を起し、第三にはそのやうに人に不足思ふは、思ふ自分の方がよくないのだとなつて来て、故に第四にはそれを止めねばならぬが、止まらぬはいかぬ／＼となつて来たのである。故に茲まで行つて幾らか解決が見えて来たかといふに、否益々暗黒になつたばかり。止めんならぬものが止められぬは、彌々いかぬ／＼となつて行つたのである。

マア私如きも此の時他力を聞いて居なかつたかといふに、子供の時より始終聞いてゐて、何う聞いて居たかといふに、『佛は悪しくてもよい、淺間しくても御助け』と、斯れに聞いて居つたのである。その聞いて居つ

たものが私が斯くなつた時に、少しも安心の助けとならぬ。『悪しくてもよい』と佛はいはれても、悪しくては私が困ると、斯ういふ心状で居つたのである。故に茲はちと言ひ過ぎるか、なれども、今までの他力を聞く者が、本統の恵みを聞いて居らぬ。そこになると先きあつた『眞實の信樂實に獲ること難し。』『悪しくてもよい』では貴方はよくても私が困る。金借りて返へされぬ時に、返さいてよいと言はれても、返へされなくては私が氣が濟まぬ。斯くして『悪しくてもよい』では、茲は安心されるわけないのであるが、――

けれども茲て一步進んで、『否、悪しくてもよいといふのでは無い、悪いのはもとより悪い。けれども君のはそれだから止めやう、悪しく思はぬやうに仕やうとそれ程つとめても、如何せん君の性質としてそれが止まぬのであるから、我は寧ろ君の止められぬ處に同情する、お察しをする』と、斯れ言はるれば、茲は大分變つて来るのである。茲は氣をつけ可きことは、何も私が出来ることせぬのでは無い、仕度いにもそのことがされぬのである。『悪しくてもよい』は、仕やうと思へばされるのを、せずともよいと言はるゝやうに聞

こえる。『返へさいてもよい』は返さうとすればされるのを、然うせずともよいとの意味に取れる。處が『君のは仕無いのでは無い、力の限りやらう、止めやうと努めても、如何せん君の荒々しき性分として、君の人は不足出さずには居れぬのであるから、我はそこを了解し、彌々その君を見捨て難く思ふ』と、斯れ言はるれば、こは實に著しきことなのである。マア中には人間、自力修養でそれやれぬことないと言はるゝ人があるかも知れぬ。すれば茲は出来るのが本統か、出来るのが本統か、

親鸞聖人が法然上人より聞かれた要は茲だつたのである。それは當時の佛教界では、『戒を持たないかぬ、修行をせねばいかぬ』これが當時の教界で最も喧しく言はれた處で、梅尾の明恵上人始め、中には自身の身體に傷けてまで、眞地目に實行しやうとした人があつた程なのである。處が法然上人の言はれた處は、末世の今日となりては、それ程まで思つても、それが終に出来ることと無いことを阿彌陀佛豫ねて知召し下されて、そこを見て下されたからその者には戒ではないかぬ、修行ではないかぬ。その者を救はんが爲に茲に特別

の大悲が現はれて下されたが、阿彌陀佛の選擇本願であると、斯う言うて下されたが法然上人の御教化であつたのである。これは宗教の言葉でいふと斯くなるのであるも、私が實際に苦んだ處としては、『何うかして無我になり、人に不足思はぬやうになり度いが、それがなれぬでいかぬ／＼』と、これであつたのである。茲は餘程氣をつけぬと『せいでもよい』になり易い處。仕やうと思へばされるけれど、『せいでもよい』と、私自身が長らく之に聞いて居つた爲め、私が茲でもう慈悲の方に、考が移れなかつたと思ふのである。

一三 他方に於て大變化が起つて来る源

そこでマア私が最後に出て来た處は、今いふ如く『誰れかこの自分の出来ぬ處を見て呉るゝ者は無からうか』と――これがマア私のこの時一番苦しかつた處は、斯ういふ風になると、あちらにもこちらにも私が人に隔ての心が起つて来て、宗教の言葉で言ふと修行戒行の立派な言葉になるのであるも、私の苦しんだのはごく／＼のさ／＼やかなる處。それは自分のやうなことゝなり果てゝは、『人が斯う思ひはせぬか、あゝ思ひはせぬか。』この人に隔てる心か起つて来て、その爲め私は

何うにもならなくなつて仕まつたのであつた。故にこれになると『敵を愛する』などの言葉はあつても、第一人を敵視し、隔てゝ居て、人をよく思ふなどのことは逆も私には出来ぬ。『哀はれ願くば、誰か一人、私か是程やつても出来ない者である處を見て呉るゝ者は無からうか』と。——最も茲で世間種々なる安心の教はありて、『あゝするとよい、斯うするとよい』は頻に言はれるのであるけれども、何程やりても、私はもう我慢が止まぬの故、茲を『イヤその止まぬのは、それが汝の性分なからである』と、この私の止まぬ性分を理解して呉る人は無からうか』と、——故に茲はもう私には一般的話ではいかなかつた。

茲は宗教聞く人に注意すべきは、一般的の原則を聞くのが宗教と、皆な斯れに聞いて仕まつて居るのである。そのことは誰にても適要さるゝことのやうに思はれて居るのである。誰にても着れる着物といひても、それは私に合ふ着物で無くては何もならぬ。私にはこの時の隔て深きは私特有の性分と思つて居つたのである。故にこの濫太き、我慢な特別の性分にあへば、如何なる人も呆れ、斥けるに決つてゐると思つて居るのである。

うなるとあの人間が行き處がなくなつて仕まふ。成る程あれは悪いには違はぬも、然うなるとあれの身が可哀想故、そういふ人間程よけ哀れみ、見てやらなくてはならぬ。『斯うなると』然ういふ者程よけ氣の毒』といふ、茲で全然今迄とは變つたものが現はれて來るのである。處が『悪うてもかまはぬ』『悪うてもお助け』の方は、一應はそれでも通れるやうであるけれども、二度三度自分の悪しさが止まぬとなると、もうそれは安心して居にくくなる。眞宗信者の安心の定まり難い病原は茲にある。

抑々『超絶して去りて安養國に』は、悪しければいかぬと斥けられる人生に、如何にしても悪しさが止まぬ故、悪しくてはいかぬと、之で超絶出来ないうて居るのである。それはこの人生は、何處迄もこの五分々々故、爲に動きがつかぬ。それは何處までも自分の悪しさを抑えて、最後までそれを遣り通せるならば、それでもいけるのであるも、甚しきは無いことまで自分にしらえて、人があゝ斯うと苦しんで居る人間である。敵視して居もせぬ者を敵視させるに至るまで、人にあゝ斯う、何處までも疑ひを持ちて、行く處の人間であ

ある。故にこの處へ友人でも誰でもよい。『君のそれ程思はれても止まらぬのは、然ういふ特別の性分であることは僕にはよく分つて居るから、僕はその爲に決して君を悪しくは思はぬ』と、——茲はよく世間でも何か境遇のことなどから、人が疑ひ深くなつて居る時に、『イヤあの君のあゝなつたのは、あれは境遇の致す處である。あれのあゝなるのは無理が無い。あれは察してやらなくてはならぬ』となると同じやうに、『イヤ君のは止められることを止めぬのでない。止めやうとしても止まぬのである。止まぬとなれば止まらぬ者に止めよといふは、言ふ者の方が無理である』と、茲で一大變化の起つて來るは、斯く止まぬは無理ないと理解したとなれば、『そこを理解したからには、その君がその性分て何程争うて來やうが、隔てゝ來やうが、それは無理ない故、それを一點悪しく思ふものか』と斯の大變化が起つて來るのである。茲は斯く『止まぬが無理無い』となると、この大變化が起つて來る。よく地方の青年團などで或者を排斥するといふことがある。『あの人間は善く無いから仲間はずれ』となつた際に於て、『イヤ、然ういふのも最もであるけれども、然

る。逆も私の悪しさは止めやうが無い。そこへ持つて來て、『その止まらぬは最もである。それは無理ないと了解する。故にそれを悪しくは思はぬ』は大變化である。茲が他方に於て『手の平反した』と言ふ處の味ひである。

一四 觸光柔輦

それは『了解した』となる時は茲で問題が一變して來て、『故に更に悪しくは思はぬ』は、了解して呉れる先方の無我の哀れみて、此方の我慢を何處までも受け付けて呉れぬとなるのである。即ち此方は何程性分を發揮して、如何に争ひてそれに向はふと、それを哀はれむ無我の同情で、それに争ひて向ひ得ないとなるのである。即ち此方は如何に怒りて向つても、その怒る私に飽く迄も了解する同情の恵みより、飽く迄怒らざる心で來られるとなると、如何な怒りの私も之には驚いて『これは』となるは、茲で起つて來るのである。即ち此方は何程怒り、隔ての性分て向つても、それを理解して呉れる同情の人は、怒れば怒る程その私に怒らざる心て向はれ、我慢張れば我慢張る程その我慢の私に無我を以て向はれ、隔てれば隔てる程その私に隔て

ざる心を以て来られると何うなるかと言ふのである。言ひ換へれば私の隔て、我慢は何程あつても、それを打ち消す丈けの偉大なる積極のみ恵を以て見て下さるとなると何うなるかといふ問題である。

處が私の隔て、我慢が止ま無いのは、皆なが一應は言うてるのであるけれども、普通『これ程聞いたらもうよい加減止みさうなもの』と、大低がこの考を持つて居るのである。之は信後の場合に於ても起つて来ることがある。『あの時あれ程喜んだのだから、もう少し喜べさうなもの』と。處が如何に止みさう、喜べさうに思へても、それが喜べぬのが汝の性分と見るとである。

見る上は如何に汝がその性分て我に刃向はうと、あれは狂氣ですることである。常識でするとあれば咎めんならぬも、狂氣でするとあれば無理がないと——即ち性分て出るとあれば察せんならぬと、その隔てる私に飽く迄もそれを哀はれむ隔てざる恵みて来られるとなると——茲は私は飽く迄も積極的に言ひ度い。我々の止まぬは消極である。その止まぬで如何に愚癡出さうが、我慢で如何に冷く行かうが、その冷くしか出さぬ汝の氷の性質が哀はれてであると、その氷を照らす日輪

の温さで向はれれば、——普通ならば冷い者なら可かぬと斥けられぬならぬ處を、その斥けられぬならぬ性質に生れついた處が可哀相故、その冷い限りそれを何處までも背負ひ込まふといふ眞實で向はれて見れば、如何に冷くてもその冷い限り何處までも打ち消されて仕まふ處が出て来るとないかと申すのである。茲はこの何れ程でも、我々の冷さの限り消されて仕まふ處まで聞かなかぬ。即ちそこが觸光柔軟で、慈悲に觸れると身も意も柔かにされて仕まふとあるは茲である。

處が茲は我々の信仰上の自覺としては、我々が慈悲に接した時、我々がそれになつたとなつたら大間違ひである。私なんぞ我慢の性分が今に少しも柔軟になんかなれて居や仕ない。故に信仰に這入つた時『自分』は之で幾らか柔しくなれた』とあつたら警戒を要する。マア私の話を讀み聞き仕て下さる程の方は、何れかと言へば氣の優しい方の方。併し自覺としては自分は優しいと思つて居らるゝは無からうと思ふのである。即ち然らういふ、『如何にしても剛情我慢の止まぬ性分をば哀はれに思ふのであるぞ。汝如何に澁太くていかぬと

いふも、それに此方は呆れるので無いぞ』と——實は今迄澁太いのをいかぬ——と抑えられる世間ばかりだつた故、益々澁太くなるより仕方が無つたのである。久遠劫來その澁太さでやり來つた人間故、却々澁太くなさにはなれぬ。『そのなれぬ者故哀はれに思ふの故、それに善し悪いふのでは無いぞ』——も一ついへば『斯う言へば言はるれば茲で頭が下らぬならぬのに、それが下らぬといふは何といふ自分であらう』處が慈悲の方には『それだから仕やらの無いのが哀はれと言つてこそあれ、汝に頭下げよと何時言うた』と、斯く何處までも——私の仕やらが無いのに限りなく温く向はれるもの故、如何な私もこれには終に恐入り、有難く、身意柔軟にならざるを得ぬとなるのである。猶ほ茲は『歎異鈔』十六章を頂くとよい。十六章は茲の處の味ひを示されたるものとして、有難き章である。

一五 『歎異鈔』十六章

『歎異鈔』の十六章——
信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもあかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと。——

信心の行者があつから腹をも立て、悪し様なることをも犯し、同朋同侶にあひて口論をもしては、必ず廻心といひて、その都度——に謝りはて、廻心懺悔して、原の心に取り直さねばいかぬといふこと、こは極めて最なことである。處が聖人のはいふことではなくて、

——この條斷惡修善のこゝちか。——
そういふことを言うてゐるのは一つ——に惡を斷ち、善を修して行く斷惡修善の積りて居るのか。との仰せである。

——一向專修のひとにをいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。——
然らういふ朝な夕なに一邊々々廻心して行くもどかしいのではなくて、——もつと露骨に言けば一邊々々に借金帳を佛うてゆくしち面倒なのはなくて、一向專修の人に於ては、廻心といふことは唯一度丈けてある。眞のお慈悲のお意が貫徹して下されたその時唯一度丈けてある。

——その廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにて

は往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。

言葉が大分専門的であるも、『日ごろ本願他力眞宗を知らざる人』といふと、眞宗の教でも知らぬ人の如くに聞かれるも、親鸞聖人の時にはまだ眞宗といふ宗派など出来てや仕無い。本願他力眞宗とは、十方衆生を哀み給ふ佛の恵み、——それは聖人が

如來の教法を十方衆生にときさかしむるときは、たとへば如來の御代官をまうしつるばかりなり。(御文)

と仰せられた、その十方有りとする者。腹を立て愚癡を起す人間に、『成る程その腹の立つその性分を可哀相に思ふ、愚癡が出れば出る丈け彌々以て、いとをししく思ふ。故にその愚癡、腹立ちは毛頭悪しくは思はぬぞ』と、斯く何處々々までも私を隔てず、咎めず、融かして仕まふ恵みを以て向つて下さる、この思ひがけなき恵みが本願他力眞宗である。親鸞聖人に言はせると、即ち『眞實の教、淨土眞宗』である。眞宗とはこの恵みのことを眞宗といふたのである。そしてそれは今私が斯く現に、即ち先きの親の郷里より親の傳言を持つて

哀れみ思召す不思議の眞實を加えらるゝもの故、その分らぬ人間がこの思召には感泣して有難いとなるは、即ち智慧を賜はるが故に、慈悲に遇へ、光に接せられたとなるのである。

一六 『彌陀の智慧をたまはりて』

甚だ突然であるけれども私に一人の従弟があつた。私と同年で、早く両親に分れ、私の父の許に於て、私と兄弟の如く育てられて来たのである。名を大歡と申した。兄弟の如く育つて来たのであるが、その人氣の毒にも學問が出来ぬ。『御經』も一緒に教はつたのであるが、『御經』の學をも悪く、京都に一緒に學問に出ても、その人學問が出来ぬ。『常觀』はよいが大歡は出来ぬ。『と』と、始終言はれ／＼して来たものであつた。處がその人學問は出来ぬが、まことに人質の美はしい人で、その中適齡になり近衛師團に入隊し、非常に人から愛されて次第々々に昇進し、日清戦争の際には軍曹で出かけて行つたものである。日露戦争の終末の際に於て戦死した。その人日清戦役を終りて歸國した時のことである。マア軍隊の方では幸に出来が好く、一命をも完うして歸つて来て、信徒を初め友人等、皆な來り集

來て、親の心を知らせる如く、それを今私が斯く皆さまに申上げて居るわけである。『イヤ然ういふ恵みが本統にあらうとは思へぬ』と言はるゝかも知れぬも、そこになると『否、その如く御經に書いてあるから』などの、にすい話でない。現に御同やう、斯く悪しさが止まぬで困つて居る處に、『その止まぬを悪しく思はぬお心』と知らざるれば、もうその『悪しく思はぬ』といふ、それがほとけのみ心である。故に不思議なる哉、然ういふ意外のお心と、之を聞かされるれば、如何なる者もお心には畏入り『之は有難い』となる。即ちそれが本願名號を知らざるゝ一念に、佛の廣大なる心が到つて下されたもので、即ち斯く他力眞宗は、佛の方より偉大なる恵みを加えらるゝ處から分る。即ち『日ごろ本願他力眞宗を知らざる人、彌陀の智慧を賜はりて』とある、この智慧を賜はるが著しい事となつて來るのである。それは智慧を賜はるは、何か變つたことがあるかに聞かれるのであるけれども、彌陀の智慧を賜はるは『そういふ愚癡意味のそれに何處までも呆れな』のが恵みであるぞ。そのやうに分らぬ、それ故その分らぬのをば哀れむのであるぞ』と、この何處までも

り、喜び迎えて呉れる。自分としてもこの方はマア結構であつたも、さて之からは家に歸つたとなれば、この後は自分一人で誰も居無い。自分一人で自分の寺をやつて行かなければならぬ。第一今まで軍隊の事ばかりやつて来て、宗旨の事とは何等の學問もなく、自分のやうに愚かなことで、この先き何うして門徒教導をやつて行くのかとなりて、俄に何とも言へぬ淋しさを感じ、先づ自分の家に歸り着いて、本堂に參詣し、尊前に拜禮を遂げ、何心無く其處に在つた蓮如上人『御文』を頂くと、

それ八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世を知るを智者とすといへり。

その人大に感激して、『今迄學問が有るの、無いのと苦に病んだも、自分がこの愚かなる、仕やうの無い身で、この愚かなる哀みを見捨てない御眞意を頂かせて貰ふたのが智者である。設ひ何程學問道理はあつても、八萬の法藏を知つたのが智者で無く、『一文不知の尼入道なりといふとも、後世を知るを智者とすといへり』この愚かなる自分如き身が、この愚かを哀みを見捨て

なき御眞意を聞かせて貰ふのが眞の智慧を得させて頂くのであつたか』と、爾來この慈悲一つを喜んで、戦死に至るまでやらせて貰はれたことであつた。即ちこの眞實の智慧に氣づかせて貰つて見ると、學問があるの無いと言ふも、要するに然ういふ愚かな、仕て見やうなき自分自身であつたのである。爾るにそういふ愚かな自分故、その愚かなるを哀はれみて、その愚かなを捨てぬとの眞實の恵み。一度びこの恵みに遇はせて貰つてみると、成る程この愚かな身の上で、彌々自分の致し方無つたことが分つて、『もとの心を引きかへて、本願をたのみ參らすをこそ廻心とは申し候へ。』——即ち眞實無き私がその眞實なきを捨てぬ眞實に夜をあけさせて貰ふた一念が、眞の廻心となつて来るのである。

そこで廻心にも二通りあつて、我と我が心に『あゝ、惡うなりました。』とする廻心は自力の廻心、自力の懺悔、それは本統の廻心では無いが、本統の廻心は斯く彌陀の智慧を賜はるが故に、——即ち先きの『乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に由るが故に』である——斯ういふと何か變つた力でも現はれて、不

して廻心を言はぬかて——それは成る程その後には於てかて、出會ひ頭かぶたまに人から突きかゝつて來らるれば、私の方は『何するか』と行き度くなつて來る。すると『あゝまた五分々々の性分が出て來たわい!』と、私の方から控えるでは無けれども、横合ひの方よりその五分々々を哀はれむこの恵みの爲にその五分々々を取られて仕まふて、自からその奴が頭が下り、その五分々々から超絶せしめらるゝは、即ちこの恵みの御利益である。若し之がいつ迄も五分々々から超絶されず、一つ／＼に廻心して、いつ迄も五分々々の心について廻らんならぬやうでは、永劫に流轉輪廻から離れられぬとなつて來るのである。

一七 自然のことはり

さてそこで今の『歎異鈔』、次ぎの言葉には、
——一切のことにあしたゆふべに廻心して、往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちはいつるいき、いるいきをまたずして、をはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のちもひにも任せざらんさきにいのちつさば、攝取不捨の誓願は、ひなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつる

思議な現象でも起るかに取られるが有らんかなれども、ナニ變つたことがあるので無い。『信仰之餘瀝』には『信仰は健全なる常識に外ならず』と書いて置いた。即ちそこに更に理解されぬことがあるので無い。斯く私の悪しきを哀れみ、悪しきを何處迄も捨てぬ恵みが本願、大悲、名號なることを聞かざるゝ、その一念にてある。之を聞かざるゝから、之を聞く一念にこの大轉換が起つて來る。故に他力は決して六かしいこと無。併し之を聞かざるゝといふことは、これは容易に有り得難いこと、即ちこの眞の恵みを蒙りて、信樂開發するといふことは、これは容易ならぬことになつて來る。併しひと度びこの恵みを興へらるゝと、その恵みは如何に罪深からうが、如何に困難あらうが、その罪深い限り何處々々までも哀み捨てぬの恵みなれば、設え如何に成り果てやうと、如何に困難現はれやうと、その現はれる限り、哀み捨てぬの恵みには、如何な我等も満足させられて仕まうて、不足の根を絶やされて仕まふ處が、『もとの心を引きかへて、本願をたのみ參らす』と、斯ういふことになるのである。さて斯くひと度び満足させられてみれば、最早や一度々々に心を取り直

といひて、こゝろにはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんすれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらするこゝろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。
此方がちつとでも『優しくなれば』『善くされれば』といふ思ひのあるは、また恵みのお意が徹底して居ないからである。

——信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよく願力をあふぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいてくべし。
サア茲で自然といふ言葉が現はれて來た。私より毛頭善くされるではなけれども、それに呆れぬ慈悲が飽く迄優しく仕向けて下さる故、自然の理りにて、自づから優しくされて仕まふとである。

——すべてよろづのことにつけて、往生にはかこきおもひを具せどして、たゞほれくゝと、彌陀の御

恩の深重なることをつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。

即ち之は先きの觸光柔順の様である。私其何處迄も優しくされず、何處迄も剛情我慢の者が、何處までもそれに呆れず、何處迄もそれに優しくする恵みの人に出會つた様が、この觸光柔順とるとよい。爾らばそれは一念の時丈かといふに、信後に於ても然うである。よく『今になつては信前と餘り變らぬ』といふ不審が起るものである。如何にも日數経れば全く以前と相變らずの者なれども、それに呆れぬのが即ち恵みであることを知らざるれば、その者がこの恵み一つは如何にも有難い。即ち南無阿彌陀佛、々々と、おのづから『念佛も申され候。これ自然なり。』之は必ずこの慈悲に攫まれたからは、慈悲の力で必ず然うせしめらるゝの故、即ちそれが『必ず超絶して、去りて安養國に往生することを得』である。安養國に往生するは、何も死ぬ時初めて往生するので無い。他力に於てはこの恵みを聞く一念に、往生すべき身とさせられて仕まふの

に、それ故その五分々々が離れられぬを哀み、温めて下さる慈悲の爲に、おのづからその界に安んじ、堪え忍ぶ力が現はれて下さることを申すのである。それはもとよりこの界は商ひ、奉公、獵、漁、皆なこれ人間の五分々々の顯現に外ならぬ。或は面倒な外交問題も起つて来る。色々の著しい事件も現はれて来る。それは極りなく起つて来るも、その起るに就けても、その起る仕方の無さを哀み給ふ恵みの心の彌々温さを聞けば、おのづからその者が自然の理りにてその間に在りながら心が轉換せしめられ、『しかれば念佛も申され候、これ自然なり』である。即ち之が悪趣自然に閉ざされて仕まふ處の狀である。斯くして自然のお力にて『道に昇るに窮極無し』——この恵みは、然う爲さしめずには措かぬの恵みに攫まれて仕まふたの故、そのお力にておのづから然う爲さしめられる。それにはもう此方の方より斯うなりて、あゝなりての思ひは一つも無い。『イヤ之丈け聞いたのだから、も少し、らくになれそうなもの』との思ひも出るのであるけれども、ナニなれぬからなれぬを哀み、捨てぬとの慈悲にてましますのである。否、此方の方よりはそらいふなれも

故、即ち一念に往生である。それは即ちその一念に『横に五惡趣を截り』——五惡趣を截りは截られぬ私に横合ひよりその截られぬ處を買ひ込み、截られぬ私にてお見捨て無い心をお届けされるもの故、自然の理りにて五惡趣を斷ち截られ、恵みの中に攝取されて仕まふ。私は喧嘩の止まぬ性分なれども、その止まぬ水の私に、その水の性が『寒からう、如何にもそれは察しする』といふ、何處々々までもの温い慈悲で向はれるもの故、如何な水の私も終にはその水の心を和げられ、融かされて仕まふは、即ち『横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ』である。即ち斯く水の心を融かされて仕まふもの故、二度と再び人生に人相手にあゝ斯うがされなくされて仕まふが閉づである。すると人生に再び善し悪し、争ひの生活は起らなくなつて仕まふかといふに、然うまで茲は意味を取り過ぎてはいかぬ。私の方は何處までも離れられぬ人間なのである。その離れられぬが、離れられぬを見て下さる恵みの爲に、おのづから救はれて行く有様を申すのである。私の方はもとより五分々々の思ひを起す。それはもとより五分々々の同士の五分々々の世界。けれども、その五分々々の人生

せぬ諸の愚癡を思ふ、その愚癡深きに何處迄も呆れて下さらぬ御眞實の深さを聞けば、如何な我等もその御眞實の程には恐れ入り、満腹して仕まふて、即ち『往き易くして而も人無し』である。即ち私の方が然うならずには居られぬ處の恵みを聞かざるゝの故、これを聞かざるれば、之れ程易いことは無い。けれどもその聞かせるゝ恵みの方は頂かず、之を自分の思ひの方で往かうとしたら、それこそ大變なことになる。我々が金の無いのを哀れみて、下さらうとある恵みの眞實なることを頂けば、之は受けずには居られぬ處の恵みであるも、只て貰ふ道理は無い、少しは拂はんならぬといふ、我慢が這入つたとなつたらもう受けられぬ。處が大低の方が、この金拂ふ積りて、聞いて居られるが甚だ多いのである。『否、拂はふにも金が無い爲め買はれぬ者が氣の毒故、その買はれぬ人に之は只て上げやうといふのである』『イヤ只まてとは思はぬも、少しはまけて貰へるのが有難い』と、こんな聞き方仕て居る人が多いのである。『ナニまけて貰へるなど、は、まだ汝は買へる氣して居るのか。買へぬて仕やうが無いそ汝が哀はれて見て居られぬ故、我はその汝を何處々

々迄も脊負つて立たうといふ、それはわが哀れみの親心であるぞ」と、之が如來の加威力といふことなのである。故にひと度びこの恵みの親心を加えられれば、如何な我等もまだ買へる氣して居つた日頃の思ひを愧ぢ入り、廻へし、この恵み一つには歸入せしめられずには居られぬ。故に蓮如上人の『御文』にはその處をあらこゝろえやすの安心や。又あらゆきやすの淨土や。これによりて大經には易往而無人とこれをとかれたり。この文のこゝろは、安心をとりて彌陀を一向にたのめば、淨土へはまいりやすけれども、信心をとるひとまれなれば、淨土へはゆきやすくして、人なしといへるはこの經文のこゝろなり。云々。

如何にも有難い御教化と思はせて貰ふのである。最も肝腎は、我々自分で買ふ氣が離れられぬ、それが我々の我慢の性分である。處がその我慢を止めよてない、その止まらぬに何處々々までも呆れないぞとの御眞實である。故にこの御眞實でましますことに氣をつけさせて貰はねばならぬ。ひと度びその御まことでましますことに氣がつくと、如何な我等もそれには喫驚して恐入り、初めて五分々々の原則を廻へして、その慈悲

一つに腹ふくれさせて貰ふと斯うなるのである。『その國逆違せず、自然の牽く所なり』——之は初めにもいふ『銘文』の示しの續きには、

其國不逆違自然之所牽といふは、其國はそのくにといふ。不逆違はさかさまならずといふ、たかはずとなり。逆はさかさまといふ、違はたがふといふなり。眞實信をえたるひとは、大願業力のゆへに、自然に淨土の業因たかはずして、かの業力にひかるゝゆへに、ゆきやすく、無上大涅槃にのぼるに、きはまりなしとのたまへるなり。しかれば自然之所牽とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。まことに鮮かなも示してある。以上『易往而無人』の味ひにつき申述べさせて貰ふたことである。(終)



解脱と常樂

『眞佛土卷講話』三

近角常觀

第一講

一 『涅槃經』

前講に於ては光、壽無量の眞佛の姿に就き話し、續いて『大經』及び異譯の文に阿彌陀佛の光明の尊き様につきて一々讚歎されてある。それを拜讀したわけてあつたが、若しこれを逐一仔細に拜讀するなら、文章と言ひ味ひといひ、極り無きことであるも、急ぐ必要があるから、直に次に進むこととして、

之よりの處は『涅槃經』の文を澤山引いて居られる處である。抑々この『涅槃經』の文なるものが、亦甚だ大づつばに讀んで仕まふことになるのであるも、味ひ極り無きものであつて、詳しく讀むとなれば之は餘程のことであらうと思ふ。以前より私は他の經は持たぬ

が、この『涅槃經』丈けは傍に置き、聖人が御本書中に如何にもこの經を喜んでお出でになる故、この經丈けは讀ませて貰ふ積りて居て、今にしみく、拜見することも得せず、今日に至つて居ることである。又讀むもこの經は同じことが繰返し繰返し説いてある御經故、何處迄讀んで行つても同じやうなことになるつていつて、いつの間にか止まつて仕まふことであるが、今斯く茲に『涅槃經』文を縦横に引かれてあるは、即ち中の意味深い處丈けが集められてあることと思ふ。即ち龐大な『涅槃經』文も、聖人の知らせて下さらうと思召す丈けは茲に出でること故、結局は『涅槃經』も茲を頂く外には無いこととなる。その深き味ひの處をお話す

るといひても、それは私自身が頂かせて貰うて、その氣づかせて貰ひ挨拶を、話させて貰ふほかにないのである。

二 正覺華化生

先づ

『不空羂索神變眞言經に言はく、汝當生の處は是れ阿彌陀佛清淨報土なり。』

阿彌陀佛の本願より酬報い現はれた清淨慈悲の國土である。前講にもいふ如く、廣大な大悲の眞實から報ひ現はれた慈悲の佛、慈悲の土とのことは、我々のこの當てにならぬを哀れみ、斯の者を飽く迄救ひて、永劫恵みの中に生き長らへしめやうと、その尊き恵みばかりの塊、現はれが佛であつて、その恵みによりて迎えて下さる、その慈悲の塊の國が無量光明土、それが即ち清淨報土である。その報土に我々が生れさせて貰ふ味ひは、

『蓮華より化生して、常に諸佛を見たてまつる。諸の

法忍を證せむ。』

蓮華より化生するとは、『淨土論』に

如來淨華衆、正覺華化生。

とあるお言葉により曇鸞大師の『論註』には、彼の安樂國土は阿彌陀如來の正覺淨華の化生する所に非ること莫し。

と言はれてあり、亦聖人の『和讃』にも、

如來淨華の聖衆は、正覺のはなより化生して、

衆生の願樂ことごとく、すみやかにとく満足す。

と仰しやつてある。すると形のある蓮華より生れるに目着けるかなれども、聖人はこの和讃の御左訓にも、

シャウクエトイフハ、アミタノホトケニナリタマヒ

シトキノハナナリ。

とある如く、正覺の華より化生するとは、佛が私共をその恵みの國に救ひとらずは正覺は取らぬと誓つて下され、その誓ひを終に御成就下された處から、廣大な眞實報土を莊嚴して我々に臨んで居て下さる處の恵みの國である。故に我々が極樂に生れさせて貰ふことを得るといふのも、この救はねばならぬの大悲大願が成就して、正覺を取つて下されたことが、我々が生れさせて貰ふことを得る譯け、このことが正覺の華から化生するとのことである。總て頂くは茲て頂くのである。それは斯く廣大の本願から正覺成御成就下されたといふ

のも、畢竟は何處々々迄もしてその者を救ひ果さなくしてはとの御眞實一つより來ること故、即ち然ういふ廣大の御眞實の故に如何な我等も、その御眞實一つから生れしめられる、茲を頂くことが肝腎になつて來るのである。猶ほ茲は善導大師の『往生禮讚』の文には

若し我成佛せむに、十方の衆生、我が名號を稱して、

下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らじ。彼の

佛今現に在して成佛したまへり。當に知るべし、本

誓重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。

南無阿彌陀佛の親心一つを届けて、生れしめずば正覺は取らぬと誓つて下された處の佛が、今現在に正覺を取り、成佛して、阿彌陀佛と現はれ、待ち受けて居て下さるとのことは、即ち其の廣大の誓ひが成就したといふことであつて、故に『當に知るべし本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得』と、之が同じことになつて來るのである。即ち如來が正覺を御成就下されたのが、私共を持ち受けて下さる廣大の慈悲が遣る瀬無く、私共が引き寄せられ參らせて貰はねばならぬやうに、然ういふやうに爲し遂げ、仕向けられてあるとのことである。斯ういふことは今更言ふ要

も無いやうであるけれども、今日他力を聞く者が餘りに聞き慣れて、斯ういふことをば甚だ軽いことに聞いて仕まつて居る。けれどもこれは佛の廣大の誓ひは、如何なる罪深きにも、その深い限りを哀はれむとの絶大の慈悲故、『自然の牽く所なり』で、如何な我等も之を頂き、生れねばならぬやうに、然ういふやうに成されて仕まつてあるが、佛の恵みとのことである。之が正覺の華より化生するとのことであるが――

次の『無生忍を證せん』は、佛の境涯に入らせて貰ふことを言はれてあるのである。勿論それには違はぬが、併し他力に於ては斯の無生忍を證るなどのことも、現生に於て言ふ、死んで極樂に往つた處では言はぬのである。それは忍は認定のつくこととて、廣大の慈悲頂いて、佛と成る可き認定の着いたことである。故に無生忍は極樂に往く可き身と認定のついた、即ち現生に於て慈悲頂いた一念にそれは得させて貰ふのである。『救異鈔』には

彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、もろ

の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。(十四章)。

とやうに、一念發起の時に無生忍は證らされると仰しやつてある。廣大の慈悲頂くと、彼の國に生れる者と、現生に於て然うなさせられて仕まうのである。

『壽命無量百千劫數ならむ。直に阿耨多羅三藐三菩提に至る、復退轉せず、我常に祐護すと。』

彼の土に生れ、ば極り無き無量壽の證を得、直に阿耨多羅三藐三菩提に至る云々。『不空羂索神變眞言經』には斯くの如く説かれてある。すると阿彌陀佛の土は眞の報佛報土であることは、斯く諸經からも同やうに頂くことが出来ると仰せられてるのである。

三 『聖人の眼に映じたる』涅槃經

さて次ぎからが『涅槃經』文で、之は初めにも言ふ如く、茲に引いてある丈けを拜讀すれば、同經に於て我々の頂く可き丈けは茲へ現はれ来るわけである。先づ本文を拜讀すれば、

『涅槃經に言はく、又解脱は名けて虚無と曰ふ。虚無は即ち是れ解脱なり。解脱は即ち是れ如來なり。如來は即ち是れ虚無なり。非作の所作なり。』

ある。

處て斯く文に就き一々言うて行くも容易で無い故、大意を一言仕て行くことに仕度い。それには『涅槃經』とは如何なる經であるか、それを言うたらよからうと思ふ。抑々『涅槃經』とは、彌々佛入涅槃の時に、跋提河の畔に於て最後の説法をなされたがこの經である。そうしてその趣意は我々子供の時より讀み慣れた『いろは歌』――

色は香へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢みじ酔ひもせず。

この『いろは歌』は之を言うたといふ、所謂『涅槃經』の四句の偈――

諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、生滅滅し已りて、寂滅を樂みと爲す。

この四句の偈文の中に盡きてある。それは釋尊八十年の間種々なる行化を垂れさせられて、彌々跋提河畔で滅を現じ、涅槃の城に隠れ給はんとして、『汝等豫て言ふ通り、斯くの如き無常の世の中である、諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、斯く當てにならぬ人生ぞ』と、之を説いて下されたが四句の偈の上半である。これが

『涅槃經』の本文では斯の文が説かれてあつて、それから色々の譬を擧げて説かせられてある。文字にもある如く解脱はあゝ斯うあることでは無くして、虚無の虚しき状態である。惱み、苦みから離れ、惱み、苦みの無くなつた、虚無の有様が解脱である。斯の解脱の境界は即ち如來であつて、如來は即ち『あゝ斯う』の無くなつた虚無の境界である。『非作の所作なり』は、『斯うする、あゝする』の人間作爲の境涯で無くして、本覺明の廣大の境涯であることを言はれたのである。又

『乃至眞解脱とは不生不滅なり。是の故に解脱は即ち是れ如來なり。如來亦爾なり。不生不滅不老不死不破不壞にして、有爲の法に非ず。是の義を以ての故に名けて如來入大涅槃と曰ふ。』

眞解脱とは、此の世に於ては生あり死あるも、眞解脱に至りては生死が無い、不生不滅である。不生不滅は即ち如來の境涯であつて、『不生不滅不老不死不破不壞にして有爲の法に非ず』――眞の如來の境涯は斯くの如きの永劫變はることの無い境涯であつて、この世に於ける我々人界の有爲の法で無い。故に『名けて如來入大涅槃と曰ふ』と、先づ大體斯んな調子で書かれて

『色は香へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ。』――併し斯く汝等と別れ、生ある者は死があるといふ丈けでは、安心にならぬ。故に『斯く當てにならぬ人生であるが、

色身は滅すと雖法身は滅せず、如來は常住にして變易あること無し。

佛の廣大なる證の境涯は永劫滅びるもので無い。故に今我れ肉身は滅すとも、それは廣大なる如來大涅槃の境に入りて、永劫變易あること無き法身常住の光として、汝等を導くの故、汝等悲むこと勿れ』と、茲を説いて下されたが四句の偈の後半である。之が『有爲の奥山今日越えて、淺き夢みじ酔ひもせず』故に今その廣大なる涅槃の境涯は、不生不滅、不老不死、不破不壞の神秘の境涯である。否、無苦無樂の大樂の境涯である。大寂靜の境涯であると、斯く段々言を極めて茲を説き下されてあるが此の『涅槃經』の説法である。而してその『涅槃經』に説いてある廣大なる如來涅槃の境涯を今盡十方無碍光如來に持つて來ての話が、今茲の告示なのである。

それは何ういふことになるかといふに、遣る瀬無き

大慈大悲が、凝つて救ひの大慈大願となり、その大悲の誓願に酬報して、光、壽無量のお姿として来り、五劫永劫の佛として顯現して下されたことは、『大無量壽經』に説いてある。故に言ふ迄もなく『大無量壽經』が淨土眞宗の根本經である。そこは聖人も『教卷』には、

大無量壽經、眞實之教、淨土眞宗。

夫れ眞實の教を顯はさば、則ち大無量壽經是なり。と仰しやつてある。併し之を淨土以外の御經にも説かれてある。即ち『涅槃經』『華嚴經』を初め、有らゆる御經にも淨土の阿彌陀如來の廣大なる有様が示しなつてある。即ちそれを茲へ持つて来て、お知らせ下されたが茲の『涅槃經』文となるのである。それは『和讃』で言へば、即ち『諸經和讃』を書かれてあるが、即ち茲の思召となる。

そこで『諸經和讃』を頂けば聖人の茲の思召は能く頂かれるといふことになる。『諸經和讃』には、

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、阿彌陀佛とは我々の無明の大夜を哀れみ思召し下され

我々が無明の闇に迷うて居るを哀はれむ大悲て来て下されたといふのであるが、抑々そのことは何を意味するかといふに、茲は分りよく言ふと、喩えは茲に酒に酔ひ伏して夢みて居る人間がありとする。酒に酔ひ伏して夢みて居る人間を、今覺めたる境涯の人より可哀相て捨て、置けぬ故、聲を懸け、搖り起し、呼び醒し、見捨てぬ慈悲心で向はれたとなつた場合に於て、醉つて居る人間の方からはいつの昔からか酔ひ伏して居るのであるも、覺めたる境涯の人からは疾うの昔から覺めてるのであつて、いつ目が醒めたも何も無い。永劫の昔から醒めて居る、始無く終無き、廣大な覺めた境涯であるも、眠つて居る人間の永劫の眠りがいつ迄も醒めやうが無い故、それが捨て、置けぬで、呼び醒ますずには居れぬとなつて来るのである。そこでその始無く終無き、覺めた廣大の境涯が三身門よりいふ時は、即ち佛の法身の境涯となるのである。

處て之が注意せぬならぬのは、青年諸君は眞如だの實相だの、法性だの法身だのといふ時は、私が然うであつたが、直ぐ世界宇宙の問題と引きつけて考へ易いのである。宇宙の本體が眞如であるかと考へ、世界の實

たばかりに、『法身の光輪きはもなく、無碍光佛とは現はれ下された、我々を救ひのお姿に外ならぬとなる。又

久遠實成阿彌陀佛、

五濁の凡愚をあはれみて

釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する。

斯く無明の大夜を哀れみ現はれて下されたお姿には違はぬが、その阿彌陀佛の現はれ出て下された源は——殊に茲にある久遠實成阿彌陀佛とは何うかといふに、如何にも斯く十劫の昔に救ひの大慈より現はれて下された阿彌陀佛には違はぬが、その現はれて下されたは、現はれて下された日に初めて出來上つて下されたかといふに、否、も一つ本を言へば、本覺明了の廣大なる境涯より、我々が無明の闇に迷うて居る状態を御覽下さると、その状が哀れて捨て、置けぬ故、その境涯より能々大悲の阿彌陀佛とは姿を現はし下されたかと、斯ういふことになるのである。併し茲はちと叮嚀に、青年諸君にすれば理屈に涉り易い處になるのであるも、今少し、明に仕て置く要があらうと思ふ故、——。

四 法身の境涯は理を以て談ず可らず

全體斯く阿彌陀佛の姿に就き、阿彌陀佛の姿は斯く

在が法身であるといふ風になり易いのである。處が之が然うした世界宇宙の理屈になる時は、法身と報身との連絡がつかぬ。私は之に困つたのであつた。それは私も初めは然うした道理理屈と考へ、それで充分解つて居た積りて居つたのであつたも、ひと度び煩悶に陥入つたとなつたら、今迄考へて居た法性も法身も、總て然うした道理筋道で考へて居つたことは残らず繪に書いたばた餅で、一つも私の苦しい腹を満しては呉れぬ。斯くして彌々迷ひに迷ひを重ね、苦しみに苦しみを重ねたのであつたが、——

即ちそれは常に言ふ實際問題で、人生的に人と争ひ、隔て、我慢を言ひつゝのり、斯くして彌々仕て見やうなきに立ち至つたのであつたが、それが彌々最後に救はれたは、然ういふ暗黒に迷うて居る私なることを哀み、私とその如く我慢深く、何處迄も隔て、行くのを、何處迄も斥けぬ心を先方から開いて、臨んで、下されたが廣大の慈悲心であつたと、そこに私は氣がついて、私は慈悲ばかりで安んぜさせて貰うたのであつた。さて振り反るとも、と考へて居つた眞如だの法性だの、何を言うて居つたのか全て意味を爲さぬ。故に或る時

は私は然うした言葉のあることが恨めしく、然うした言葉があつたばかりに長々分ら無つたと、故に眞如法性は談ず可らず『哲學の研究が佛教信念の消長に與へし害毒』、『信仰問題』と極言せし時代もあつたのであつた。即ちそれ程に理窟でこしらえて居る信仰は、惱みの爲には碎かれてしまふのである。斯くして惱み苦みて仕方無き時に、その惱み苦しみが開けたは、その惱み苦みを哀はれむ慈悲、同情の心か徹したとして、私は安心させて貰うたのであつた。故にそこになると慈悲ばかり、大願の思召ばかりといふことになるのであるが、――。

去りながらその慈悲、恵み、思召なるものは如何にして來たかとなると、實はその廣大の心なるものは、その苦を脱れ、解脱した、本覺明了の、目の醒めたる境涯の人が、その境涯から酒に酔ひ伏し、夢見て居る人間を見ると、憐れぢつとして居られぬ故、その慈悲が起つて來たとする。若し眞の目醒めたる處の人ならば、傍に如何に夢見て苦しんで居る者が有らうが、捨て置くのなら眞の目醒めたる人とはならぬ。私が煩悶して仕やうが無つたのが彌々救はれたとなつた

に救はれて安心するなど何のことだか分らぬ。『イヤあれは愚人の爲めの教えてあつて、我々は眞如法性を證するのだ』など、いつ角悟つた氣で居ると、それは實際の苦惱にぶつかつた時には、忽ち一度に碎かれてしまふ。そうして彌々仕やうの無くなつたのが、初めて慈悲に出遇つて安心を與へられ、安心させられると眞如法性の眞の字もイヤになると、斯ういふ具合になつて來るのである。

五 即證眞如法性身

爾らば法性眞如は言ひさうも無い筈であるが、――故に私は初めは決して言はなかつた。初は唯慈悲ばかりと言つて居つた。處が私自身に初めて深く氣がついたは、親に別れた時であつた。妙なもので、平日は慈悲ばかり喜んで居つたのであつたが、彌々親が最後の病氣の時、百方手を盡くして親の病氣を助けんとして、手が届かず老病で死なれたのであつたが、その彌々別れた時何思つたかといふに、『彌々佛の世界に導かれて、參らせて貰はれた』と、之を深く思つたことなのであつた。又『この世で一代喜ばして貰はれて、喜ばして貰はれたからは……』。殊に茲は前講に

ら、俺は安心したからといふて、人が苦んで居るのを平氣で見て居るのなら、眞の解脱を得た者とは言へぬ。眞に解脱を得たなら得た丈け、猶ほ以て苦んで居る者が氣の毒と、それを呼び起す慈悲心が起つて來ねばならぬ譯けてある。そこでその目の覺めたる境涯が即ち法性、法身、眞如、佛性、解脱、涅槃、即ち『涅槃經』は茲で出て來ねばならぬわけになつて來るのである。即ち大悲大願の起つて來る大もとは、本覺明了の曇り無き如來涅槃の境涯より我々の迷へる狀を見て、その狀が可哀相で黙て居られぬ。『無明の暗夜をあはれみて、法身の光輪さほもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する。』法身の廣大なる境涯より光を放ちて、無碍光佛とは現はれて下されたこと、斯ういふことになるのである。故に法身といふことを道理理屈に考へぬやうに仕なくてはならぬ。こはよく聞かれる問題で、此頃は多くの人が佛書を讀まれる。現に此間も或友人如きは親に別れて佛書を見るが、何うも茲の處が分らぬとて、相談に見えたのであつた。その分らぬのは茲を理屈に考へられる處にある。殊に青年者は法性眞如を自ら證することのやうに考へる。すると、慈悲

於て往生淨土といふことにしても、皆んなが未來でばかし言ふことに思つて居て、現在に於て頂くことを言はぬと、現在を強く言つたのであつたが、爾らば現在に於て慈悲ばかり喜ばして貰うて居て、それでこの世が都合よきに仕て貰へるかといふに、否、斯くなりては『さて親の病氣が助けられぬ、別れねばならぬことになつてしまつた。さて斯くなることとの親は何處に行かれたか。あ、廣大の慈悲に救はれて、それは佛のお側に參らせて貰ひ、佛の境涯に行かせて貰はれた』と、之が私の心に出て來た故、そこで初めて私は未來思想を明にさせて貰つたのであつた。それ迄は未來、死後のことは私は言はなかつたも、斯く親に別れて、親が救はれて佛の境涯に行かせて貰はれたとなりて、初めて茲を知らして貰つたのが彼の『慈光錄』になる『父の示寂によりて教えられし眞實證の靈境』なる一文だつたのである。即ち聖人は『證卷』に佛の慈悲を頂いて、其の結果この身體が亡くなりて眞實證に入らせ貰ふと仰しやつてあるが、正しく父が今この肉身を畢へ、その境に行かせて貰ふと、身を以てそこを示して下されたこと、茲の處を明にさせて貰うた事なのであつ

た。言ひ換へれば今迄喜んで居つた慈悲を、親も存生中一代喜んで見せて下され、さて彌々死に際して、死して參らせて貰ふ佛の境涯の有様を知らして下すつた、といふわけだつたのであつた。私はそこを分らせて貰つて、成る程聖人は、

蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身を證す。(正信偈)。

と言はれてあるが、成る程之が眞如法性の廣大なる佛の境涯であつたと、初めて茲に氣づかせて貰うたのであつた。

茲は先き言ふ『涅槃經』に合つて來るのである。即ち釋尊八十年の間やられて、彌々弟子に別れて滅をとり給はんとした時に『色身は滅すと雖法身は滅せず、如來は常住にして變易あることなし』と、應身の釋尊が法身常住の境を示されたと同じに、私親に別れて、『成る程今日お慈悲喜ばして貰ふと言うて居ても、如何にしても親が助けられず、天に地に失望せねばならぬ人生であるが、今や親は彌々この界を脱して、眞實證の境涯に往かせて貰はれた』と、そこへ考が出て、即ち眞如法性を斯く生命が畢る方より氣をつけられたこと

り。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふ

ことは、なを義のあるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。

眞宗の人が佛身論をする時に、この『形ましまさぬ佛』なることが、甚だ分り難い處になつて居るのである。

それは『お前の喜んで居るのは形ある佛であるも、聖人の言はれるのは形ましまさぬ佛である』など、言はれる時は、一寸分らぬことになつて來るのである。處が之などにしても氣をつく可きは、

『彌陀佛の御ちかひの……』即ち誓願が本である。

『……もとより行者のはからひにあらすして……』抑々、阿彌陀佛の誓願が起つて來た、その起つて來た根本たるや、もとより行者の計らひに非ずして『……南無阿彌陀佛とたのませたまひて……』之は先きの誓ひが『教』なれば、この南無阿彌陀佛とたのませ給ひてが『行』である。即ち佛の方より南無阿彌陀佛と頼ませ給ひて『……むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともあもはぬを……』この善からんとも悪しからんとも思はぬを『信』である。即ち廣大の誓ひのお心を頂いた結果、お

だつたのであつた。處て茲が甚だ留意しなくてはならぬ處となつて來るのである。

六 形ましまさぬ佛

それは青年諸君は讀まれぬが、親鸞聖人の書き物に、皆んなが讀みぞこなひを仕易いものに、『和讃』の奥書の處にある御文で『自然法爾章』といふがある。曰く自然といふはもとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともあもはぬを、自然とはまふすぞときよてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましますしゆへに、自然とはまふすなり。かたちもましますしめすときは、無上涅槃とはまふさす。かたちもましますらぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞ、きゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうを、しらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにはあらざるな

のづから行者の善し惡しを離れさせられて仕まふ處の有様を『……自然とはまふすぞときよてさふらふ、ちかひのやうは、無上佛にならしめんとかひたまへるなり……』即ち無上佛とは我々がすがり奉る處の佛で無い、ならしめんと誓つて下された處の佛である。『無上佛とまふすは、かたちもなくまします』——茲に斯く無上佛を、形の無い佛とあるのが解り難い處になつて來るのであるも、このならしめて下さる無上佛とは、我々が現在生活の境涯より、あゝ斯う想像を加え得る、形ある境涯で無い。『かたちましまさぬゆへに自然とはまふすなり』——形を絶した廣大の境涯でましますが故に、自然とは申すのである。『かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはまふさす』——こ

は『和讃』に

願土にいたればすみやかに、無上涅槃を證してぞ、即ち大悲をおこすなり、これを廻向となづけたり。爾るに若し形ある境涯なる時は、斯く無上涅槃とは言はぬ。即ち我々が『あゝ斯う』の、形ある境涯では無くして、今斯く現にこの肉身を持ち、苦惱を重ねて居る御同やうに、南無阿彌陀佛の親心を知らされ、肉體を畢

り人生を去つた時に、參らせて貰ふ處の、それは眞の證の境涯であるとなる。故に眞如法性は之を我々の信仰の對象と考へてはならぬ。それは我々の救はれて生れさせて貰ふ處の、證の境涯である。故に聖人はそこを『諸經和讃』には、

如來すなほち涅槃なり、涅槃を佛性となづけたり凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべし平等心をうるべきを、一子地となつたり

一子地は佛性なり 安養にいたりてさるとるべし涅槃の佛性だの、眞如だの法性だのは、安養に到りて證るべしとやうに仰せられてある。

七 方便法身の顯現

處が次には『かたちましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞ、さゝならひてさふらふ』——之は茲でぐるりと一廻轉して、その廣大な證の境涯に往き、盡十方無碍の光明に一味とならせて貰ふのであるが、この度びはその境涯より、我々この世に酔ひ伏し夢見て居るを哀はれと思召し、捨て、置くに置かれずして、その境より全面に光を放ち、現はれて下されたが阿彌陀佛と言はれてあるのである。即ち眞如法性と

なればそれは我々の思慮の届かぬ、安養に至りて證る可き廣大の境涯であるが、その境涯より我々迷ひの境涯を見るときは、哀はれて捨て、置けぬ故、その境涯よりそれを救ひの佛が現はれて下されて、是れが即ち方便法身の佛である。故に佛身論を談ずるとなれば、法性法身はその夢の醒めたる廣大の境。その境より苦惱の我々を見て廣大なる大悲心を起し、我々を哀はれを慈悲が塊り現はれて下されたが方便法身の佛となる。そうしてそれを形よりいへば光、壽無量。心よりいへば本願、名號と現はれて、我々を救うて下さる救ひの佛と、斯ういふことになるのである。茲はちと複雑した處故、よく味つて頂かねばならぬのであるが——。殊に『證卷』と『眞佛土卷』との關係が、矢張りこの味ひとなつて來るのである。それは『證卷』は、この恵みを頂いて、その證の境に往かせて貰ふが『證卷』である。それは『證卷』の仰せには、

然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の數に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。必ず滅度に至れば即ち是れ常樂なり。常樂は即ち是れ畢

竟寂滅、寂滅は即ち是れ無上涅槃なり。無上涅槃は即ち是れ無爲法身なり。無爲法身は即ち是れ實相なり。實相は即ち是れ法性なり。法性は即ち是れ眞如なり。眞如は即ち是れ一如なり。——

斯く大悲廻向の心行を頂いて、廣大な證の境涯に往き、盡十方無碍の光明に一味にならせて貰ふが『證卷』であるが、その參らせて貰うた證の境涯は、始無く終無き本覺明了の廣大な境涯であつて、その境より姿を示し、光明を放つて現はれて下されたが、無明の大夜を哀はれむ方便法身の無碍光佛と、斯ういふことになるのである。故に茲は我々の上よりいふ時は、法性法身は我々には直ぐには分らぬ。それは遣る瀬無き恵みによりて、安養に到りて證る可き廣大の境となるのであるが、その境よりはこの夢見て居る境を見る時は、それが夢が醒めて居る境涯である丈け彌々以て哀はれて、ちつとして居られぬ。即ち何うにもして救はねばの大悲の眞實が起りて、その境涯の全面より大光明を放ち、救ひの眞實の現はれて下されたのが大悲大願で、それが即ち法藏菩薩の發願といふことであり、五劫永劫の親ごゝろといふことであり、それが即ち無碍光佛の顯現

といふことになるのである。そうしてそれは直接我々に知らざるゝ處で、苦惱の我々がその思召の程に恐れ入り、初めて救ひを蒙ることを得ると、斯ういふことになるのである。

猶ほこの意味より來る時は——今の『證卷』文の續きには、——然れば彌陀如來、如より來生して、報應化種々の身を示現したまふなり。

管に方便法身の阿彌陀佛がその境より來生して下されたばかりで無く、その阿彌陀佛の慈悲を知らせて下された處の釋尊も、矢張りその境より來生して下されたお姿に外ならぬ故、先きの『和讃』には『久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしとぞ、迦耶城には應現する』——釋尊の應現も矢張りこの境涯よりであり、乃至進むと斯くこの界で惱んで居る處の御同やうが、その廣大の眞實に救はれ、ひと度びその眞實の境涯に目醒されて見れば、この度びはその目醒めたる處の者は、——そこは『救異鈔』の仰せには、

いかにいはんや戒行慧解ともになしといへども、彌

陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときこそ、

さとりにてはさふらへ。(十五章)
ひと度びその境に往かせられると、この度びはこの界に迷うて居る六道四生の有縁の者を必ず導き救ふことの出来る力が現はれて来る故、即ちそれが還相廻向といふことになりて来るのである。即ち法性法身の廣大なる境涯より、五劫永劫の眞實を持ち、救ひのお姿が現はれて下されたのが方便法身で、その救ひの眞實を知らず爲に大聖釋尊も來り、その他三國の淨土の祖師、親鸞聖人、乃至我々に有縁の者もこの廣大な境涯より現はれて、我々を導いて下さると、斯ういふことになるのである。そこになると茲に引いてある『涅槃經』の文なるものは、即ち光、壽無量の阿彌陀佛の眞佛が現はれて下された、その本源を知らして下されたと、斯ういふことになるのである。

八 第一義乘

猶ほ茲て一言、間違ひ易いのは、青年の方は動もす

一乘は即ち第一義乘なり。唯是れ誓願一佛乘なり。宗教の第一義は廣大な證の境涯を説くに無くして、その境より遣る瀨無き慈悲を向けられた、唯この誓願一佛乘が第一義乘である。人生に宗教の本義は唯この廣大の誓願、これ一つを説くにあると、斯く言はれてゐるのである。

猶ほ又『愚禿鈔』の上には
唯阿彌陀如來の選擇本願を除いて以外は、大小權實顯密の諸教、皆な是れ難行道聖道門なり。又易行道淨土門の教、是を淨土廻向發願自力方便の假門と曰ふ也。

唯阿彌陀如來の選擇本願の大慈悲のみが、宗教の第一要諦である。又

本願一乘は頓極頓速圓融圓滿の教なれば、絶對不二の教、一實眞如の道なりと知る應し。專中の專なり。頓中の頓なり。眞中の眞なり。圓中の圓なり。一乘一實は大誓願海なり。第一希有の行なり。即ち廣大な大悲大願となりて我々の上に現はれて下さされた、この本願一乘のみが第一希有の行だと仰せられてゐるのである。

ると法性法身が第一義で、方便法身は第二義とやうに考えられるのである。何故ならば法性法身は夢の醒めた眞の廣大の境涯であるから之が第一義。それより形を爲し聲を立て、現はれて下された救ひのお姿の方は第二義と、斯ういふことになり易いのである。處が之は逆で、今茲に金持ちの藏に澤山なる財物があり、難儀して居る者がありてその金、米を取出し、救ふとなつた場合に於て、金持ちの藏に澤山なる財物の有るのは第一義で、持ち出して救ふ方は第二義と思はるゝもあるかも知れぬなれども、この場合第一義は何より言うかとなるに、救ひ、救濟といふ上より言ふ時は、藏に在る方が第一義で無くして、開いて哀はれむ方が第一義となるのである。故に宗教は高尚玄妙なる佛を説くが第一義で無くして、その夢の醒めた廣大な境涯より、大悲の涙を灑いで我々枯渴の凡惡を潤し、仕て見やうなき我々苦惱の相對世界へ、飽く迄見捨て無き絶對世界の恵みを届けて下さる、この届けて下さる處が第一義となつて来るのである。故に法性法身が第一義で無くして、方便法身の救ひの佛が第一義となつて来る。そこは聖人は『行卷』一乘海釋の處の示しには、

九 證を離れて恵みを説くことは出來ぬ

併しその大悲大願なるものは、上來いふ如く廣大な證の境涯より來るのであつて、即ちその境涯、法性法身と、その全面より光を放ちて來る處の方便法身とは分けることは出來ぬ。即ち眞の目醒めたる境涯と、それより來る處の眞實とは、之を別けて考へることは出來ぬ。そこになると親が子で、子が親で——人間界の親子の關係は、哀はれむ親も哀れまるゝ子も、共に迷ひの恩愛の關係であるも、絶對大悲の眞實の恵みは、その迷ひを離れた證の境涯より現はれて、その迷ひの恩愛を哀はれむ眞實の慈悲なれば、この恵みには最初から證がついて仕まつてある。即ち證より出た恵みなのである。故に證を離れてこの恵みを語ることは出來ぬ。そこになると聖人が折々示された言葉で頂いても、例えば『一念多念證文』にあるお示しにしても、一實眞如と申すは、無上涅槃なり。涅槃すなはち法性なり。法性すなはち如來なり。寶海と申すはよろづの衆生をさらはず、さはりなくへだてずみちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。この一如寶海よりかたちをあらはして、

法藏菩薩となりのたまひて、無碍のちかひをまこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに、報身如来とまうすなり。これを盡十方無碍光佛となづけたてまつるなり。この如来を南無不可思議光佛とまうすなり。この如来を方便法身とまうすなり。方便とまうすは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまうすなり。すなはち阿彌陀佛なり。この如来は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光佛とまうすなり。この如来、十方微塵世界にみち／＼たまへるがゆへに、無邊光佛とまうす。しかれば世親菩薩は盡十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。云云。

『智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ云云。』形があるやうになつたり、無いやうになつたり、をかしいと思はるゝがあるか知れぬなれども、佛の智慧は如何なるものをも隔てることなき、無碍、虚空の如き慈悲なれば、一切を入るゝことが出来るのである。それはさういふ形を離れた廣大の證より現はれて、一切の有碍を救はうとの慈悲なれば、故に

證よりいふ時は、佛のお慈悲も形ないことになつて來るのである。即ち形なき證の境界より、その儘慈悲、眞實の廣大な、形なき救ひの御形として現はれて下さる、私共に直き／＼救ひのみ手を垂れて下さるが、盡十方無碍光如来のお姿となつて來るのである。

猶ほこのことは今ひととこ、『唯信鈔文意』で頂けば、極樂無爲涅槃界といふは、極樂とまふすは、かの安樂淨土なり。よろすのたのしみつねにして、くるしみまじはらざるなり。かのくにをば安養といへり。曇鸞和尚はほめたてまつりて、安養とまふすとのたまへり。また論には、蓮華藏世界ともいへり。無爲ともいへり。涅槃界といふは、無明のまどひをひるがへして無上覺をさとするなり。界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとしるべし。涅槃とまうすに、その名無量なり。くほしくまふすにあたはず、おろ／＼その名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ。無爲といふ。安樂といふ。常樂といふ。實相といふ。法身といふ。法性といふ。眞知といふ。一如といふ。佛性といふ。佛性すなはち如来なり。如来、微塵世界にみち／＼たまへり。すなはち一切群生海のこゝ

ろなり。草木國土こと／＼みな成佛すととけり。この一切有情の心に、方便法身の誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち佛性なり。この佛性すなはち法性なり。法性すなはち法身なり。しかれば佛について二種の法身まします。ひとつには法性法身とまふす。ふたつには方便法身とまふす。法性法身とまふすは、いろもなし、かたちもまします。しかればこゝろもあはさず、ことばもたえたり。――

即ち法性法身は我々にはわからぬ。心も言葉も絶え果てた、安養にいたりて證す可き廣大の境界であるが、――この一如よりかたちをあらはして、方便法身とまうす。その御すがたに法藏比丘となりたまひて、不可思議の四十八願ををこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。この如来すなはち誓願の業因にむくひたまひて、報身如来とまふすなり。すなはち阿彌陀如来とまふすなり。報といふは、たねにむくひたるゆへなり。この報身より、應化等の無量無数の身をあらはして、

微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆへに、盡十方無碍光佛とまふす。ひかりの御かたちにていろもまします。かたちもまします。すなはち法性法身におなじくして、無明のやみをはらひ、惡業にさへられず、このゆへに無碍光とまふすなり。無碍は有情の惡業煩惱にさへられずとなり。しかれば阿彌陀佛は光明なり。光明は智慧のかたちなりとしるべし。云云。

法性法身と方便法身と、如何にも廣大な境界から全面に光を放ち、救ひの阿彌陀佛が現はれ下されたる味ひが、よく示されてある。何程いひても言ひ盡くされぬことである。それはその筈、安養界に到りて證らせて貰ふ可きことであるが故に。

以上申す如き意味で茲の『涅槃經』文は引かせられてあるのである。(次號に續く)



求道學舎改築趣意書

求道學舎は我等が信仰の搖籃なり。如何なる不可思議の宿縁にや、創立已來既に滿二十年の齡を重ねたり。過ぎ來し方を顧みれば、はや涙ぐまるゝこと多かりき。其事業たる其名の示すが如く、眞面目に信仰を求むる學生の爲に設けられたる寄宿舎にして、其側ら講話を公開し、信仰坐談を爲して、四方求道の望に應じたりき。而して七年已前大方淨財の喜捨を仰ぎ、既に求道會館の落成を告げ、幸に現時信仰純熟の機縁に應ずることを得て、確に其事業の一半を満足することを得たりと雖、其一半たる寄宿舎の方面は空しく取殘されて、家屋益朽敗を極め、風餐雨蝕、柱傾き壁破れ、殆んど人の住居に堪へず、今や一刻の猶豫を許さざるに至れり。而して此搖籃より巢立

ちたる出身者は、今や社會各部に位置を占め、各自信仰的立脚地より、何れも精神的貢獻を爲さざるはなし。經營者自身として、何等人の爲に盡したりといふ自覺を有せず、唯朝夕佛を禮し、起臥信を語りたるに過ぎずと雖、佛天の冥加空しからず、一たび學舎の門に入れるの人は容易に出づるを欲せず、而して社會に立つに及びて、益々在舎の當時を思慕し、一たび播かれたる佛種は、必ず機縁の純熟を促して、終に同一醜味の信海に朝宗せざるはなし。是に於てや、歳久うして、初めて求道的寄宿舎の意義甚深なるを自信することを得たり。今や思想問題の波濤は世界を震撼して、人生生活の根本を脅かし、眞摯なる學生何れも解決の歸趣に惑はざるはなし。此時に膺りて求道學舎を擴張して、時勢の要求に應じ、多年の實驗に鑒みて、理想の經營を實現し、以て信仰生活の標的たらしめんと欲す。是洵に思想解決の鍵鑰にして、社會改善の捷徑たらずんばならず。是を以て數年來我出身者及び同情者諸君より、學舎の改築を促さるゝこと切にして、遂に私に決せざるべからざる最後に迫れり。而して時恰も篤

近角常觀著

慈光錄

再版

改正定價一圓二十錢 郵稅四錢

本書は親鸞聖人の跡を慕へる著者が、信後生活に於ける衷心の懺悔感謝の披瀝である。蓋し一念徹底の信源より顯現し來る絶對救済の眞宗教が、如何なる眞人生を開顯し來るか、本書に於て遺憾なく表白されてある。幸に著者の信仰に汲まるゝの士は、著者が信に於ける最も心力を傾注せる文字として、本書を心讀精讀あらんことを。

◆集金郵便◆

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り本所に於て發行の書籍は御便利集金郵便の御注文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料を加へたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

大正十年十二月十日發行(毎月一回發行)

求道前號要目 (十年二月發行)

獨斷思想の危険と無定見の害毒
親鸞聖人の絶對信 II 『眞之善知識』

近角常觀

眞佛顯現の本源 II 『眞佛土卷講話』

近角常觀

争鬭と解脱

●本誌は毎月一回發行とす●誌代は總て前金拂込みのこと●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は二錢切手にて一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部卅錢 六冊分 一圓七十錢 (郵稅不要)

大正十年十二月七日印刷
大正十年十二月十日發行

發行所 編輯 印刷 近角常觀
東京市本郷區森川町一番地 藤駒次郎

發行所 求道發行所
電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)